福岡市埋蔵文化財調査報告書第 916 集

藤 崎 遺 跡 17

― 藤崎遺跡第35次調査報告書 ―

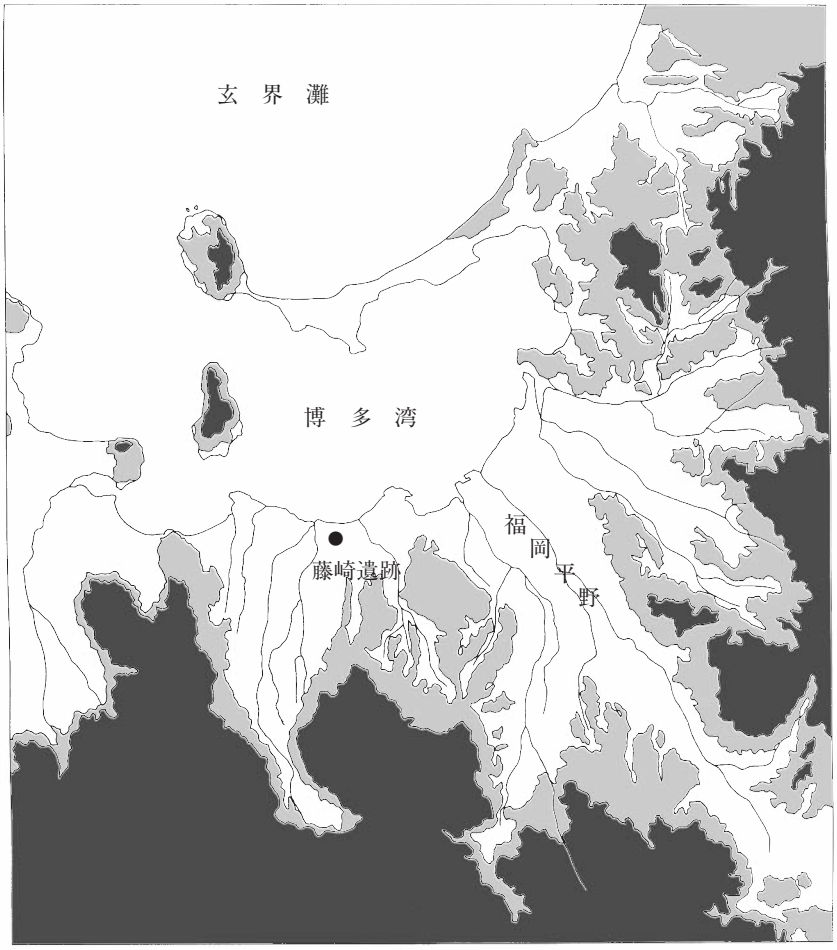
2006

福 岡 市 教 育 委 員 会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 916 集

藤 崎 遺 跡 17

― 藤崎遺跡第35次調査報告書 ―



調査番号　0488
遺跡略号　FJA-35

2006

福 岡 市 教 育 委 員 会

1．藤崎遺跡第 35 次調査地点とその周辺（西から）
調査区東に隣接するマンションの背後に亀井味楽窯の登窯が保存されている。画面右上の森が紅葉山で、中央のマンション左手が東皿山の推定地である。

2．整地層 SX-01 全景（北から）
丘陵の地山傾斜を粗く雛壇状に削り出し、さらにその上に黄褐色砂質土を用いて 9 段に整地している。その傾斜角度は概ね 2．5 寸勾配に換算される。

3．調査区東壁の陶片堆積状況（南西から）
整地層の直上に多量の陶片及び窯道具が廃棄され、うず高く堆積している。

鉢（34）

徳利（82）

碗（59）

碗 60）

向付（26）

小皿（1～4、12、23）

蓋（41～43）

小皿（14、他）

置物（94、他）

小皿（9～11）

小皿（7、8、他）

序

福岡市は、大陸・朝鮮半島に近いという地理的条件から、日本列島における東アジア文化導入の門戸としての長い歴史と、その中で育まれてきた多くの有形・無形の文化財を有しています。現在、市の無形文化財に指定されている高取焼もその一つですが、これは16世紀の末、文禄･慶長の役に動員され、のち福岡藩主となる黒田如水・長政父子によって連れこられた朝鮮の名工八山をその開祖としています。爾来400年にわたり、高取焼の優れた作品は、諸侯をはじめ数多くの人々に珍重されてきました。

これら数々の名品の一方、この西皿山では大量の日常雑器が生産され、藩の経済活動の一端を担ってきました。西皿山は、明治維新以後の史料散逸によってその実態が語られる機会があまりありませんでしたが、さらに近年の都市化や産業構造の変化に伴い窯元は1軒を残すのみとなりました。高取地区は、福岡市における西の副都心として発展がめざましい西新・百道地区に隣接しており、窯跡をはじめとする関連遺構はそのほとんどが壊滅していると考えられます。

本書は、共同住宅建設に伴い発掘調査を実施した、藤崎遺跡第35次調査の成果を報告するものです。今回の調査では、高取焼西皿山に関連する大規模な整地層を検出するとともに、膨大な量の焼損品や窯道具が出土しました。江戸時代後期から近代にいたるこれらの遺物は、西皿山で焼かれた高取焼の多様性を示すとともに、その実態を考察する上で貴重な資料を提供するものとなりました。

今後、本書が文化財への理解と認識を深める一助になるとともに、高取焼研究の資料として内外で活用していただければ幸いに存じます。

末尾になりましたが、発掘調査から本書の作成にいたるまで、多大なご協力をいただきました椛島ウメ様をはじめ、調査指導いただきました諸先生方、亀井味楽様ほか高取地区の皆様等関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成18年12月28日

福岡市教育委員会

教育長　植　木　とみ子

例　　言

1．本書は、福岡市教育委員会が共同住宅建設に伴い福岡市早良区高取２丁目219－２外９筆地内で発掘調査を実施した藤崎遺跡第35次調査の報告書である。

2．調査記録の作成および整理分担は、次のとおりである。

遺構実測……松浦一之介
遺物実測……松浦一之介、谷直子（九州大学大学院生）
遺構写真撮影……松浦一之介
遺物写真撮影……力武卓治
遺物復元……木下久美子、田中由紀、宮崎由美子、長浦芙美子
土層剝ぎ取り……比佐陽一郎、片多雅樹（福岡市埋蔵文化財センター）
刻書判読……鳥巣京一（福岡市教育委員会文化財整備課）
製　　図……松浦一之介、木下久美子
本文執筆……松浦一之介

3．本書で使用した方位は磁北であり、座標は国土調査法第Ⅱ系に拠る。また、標高は東京湾平均海面高度（T.P.）に拠る。

4．本書で使用した地図は、人文社発行の「福岡県全図」、大日本帝国陸地測量部発行の「二万分一地形図福岡近傍十一號」および福岡市発行の福岡市都市計画図を原図としている。

5．本書で使用した遺構の略号は、奈良文化財研究所の用例である。

6．本書に関わる遺物および記録等の全資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵される予定である。

7．本書の編集は、松浦一之介が行った。

<table>
<tr><td>遺跡調査番号</td><td colspan="3">0488</td><td>遺 跡 略 号</td><td colspan="2">FJA-35</td></tr>
<tr><td>地　　番</td><td colspan="3">福岡市早良区高取二丁目219-2　外</td><td>分布地図番号</td><td colspan="2">室見081</td></tr>
<tr><td>開 発 面 積</td><td>412 ㎡</td><td>調査対象地</td><td>412 ㎡</td><td>調 査 面 積</td><td colspan="2">412 ㎡</td></tr>
<tr><td>調 査 期 間</td><td colspan="6">平成17年2月17日～平成17年5月17日</td></tr>
</table>

ハマが着いた茶碗（53）

本文目次

第１章　はじめに …… 1

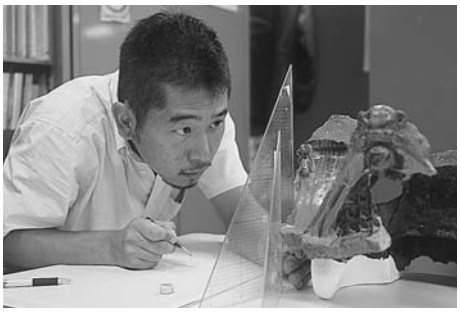
１．調査に至る経緯…… 1
２．調査の組織…… 1

第２章　遺跡の立地と歴史的環境 …… 2

第３章　調査の記録 …… 5

１．調査の概要…… 5
２．検出遺構…… 7
⑴　SX-01 整地層 …… 7
⑵　SX-02 埋納遺構 …… 7
３．出土遺物 ……10

第４章　小　　結 ……33



小皿

図版目次

巻頭図版１　１．藤崎遺跡第 35 次調査地点とその周辺（西から）　２．整地層 SX-01 全景（北から）
　　３．調査区東壁の陶片堆積状況（南西から）
巻頭図版２　鉢（34）、徳利（82）
巻頭図版３　碗（59・60）
巻頭図版４　向付（26）、小皿（１～４、７～12、14、23、他）、置物（94、他）、蓋（41～43）
図１　筑前地方の近世窯業施設分布図（縮尺 1/600,000）…… 2
図２　福岡城下と周辺の窯跡分布図（縮尺 1/50,000）…… 3
図３　藤崎遺跡調査区の位置と周辺環境（縮尺 1/6,000）…… 4
図４　第 35 次調査区位置図（縮尺 1/1,000）…… 5
図５　第 35 次地点現況（西から）…… 6
図６　第 35 次地点現況測量図および調査区東壁陶片層土層図（縮尺 1/200、1/100）…… 6
図７　調査区東壁陶片層全景（北西から）…… 7
図８　調査区東壁陶片層部分（南西から）…… 7
図９　B-3 グリッド南壁陶片堆積状況（北から）…… 7
図 10　B-1 グリッド整地層上面遺物出土状況（南東から）…… 7
図 11　整地層 SX-01 及び埋納遺構 SX-02 実測図（縮尺 1/200、1/40、1/20）…… 8
図 12　埋納遺構 SX-02 検出状況（東から俯瞰）…… 8
図 13　整地層 SX-01 全景（西から）…… 9
図 14　整地層 SX-01 全景（北から）…… 9
図 15　埋納遺構 SX-02 検出状況（東から）…… 9
図 16　埋納遺構 SX-02 鳥骨出土状況（東から俯瞰）…… 9
図 17　小皿・托等実測図（縮尺 1/3）……11
図 18　盤・鉢・向付等実測図（縮尺 1/3）……13
図 19　碗・急須・蓋等実測図（縮尺 1/3）……15
図 20　銚子・徳利・瓶等実測図（縮尺 1/3）……18
図 21　燈明器・文房具等実測図（縮尺 1/3）……21
図 22　香炉・花入等実測図（縮尺 1/3）……23
図 23　火入・植木鉢・手焙・稲荷社等実測図（縮尺 1/3、1/4）……25
図 24　大型擂鉢実測図（縮尺 1/3）……28
図 25　擂鉢、瓦実測図（縮尺 1/3）……29
図 26　鍋・甕等実測図（縮尺 1/3）……30
図 27　井戸ポンプ実測図（縮尺 1/4）……31
図 28　刻書拓影（縮尺 1/4）……32
図 29　高取系諸窯の勾配（縮尺 1/300）……33

第１章　はじめに

１．調査に至る経緯

平成 16 年 12 月 1 日、椛島ウメ氏より、福岡市長に対し、福岡市早良区高取 2 丁目 219-2 外 9 筆地内における共同住宅建設について、開発行為の許可等に関する規則第 6 条の規定により、事前協議の申請がなされた。これを受け埋蔵文化財課では、同申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である藤崎遺跡に含まれることから、同年 12 月 16 日、同月 20 日に踏査を実施した。その結果、申請地内の削り残された丘陵で高取焼関連の陶片や窯道具が表面採集されたため、平成 17 年 1 月 11 日～13 日にかけて試掘調査を実施した。その結果、丘陵の大半が廃棄された高取焼や窯道具で形成されており、基底面で粘質土を貼った整地層の確認に至った。試掘調査の結果、申請地内のうち、残存する丘陵部約 412 ㎡の範囲に西皿山関連の窯業施設が遺存しているものと推定され、現地での保存を協議した。しかしながら、設計変更は不可能と判断され、遺構の破壊が回避できない箇所を対象とした記録保存のための発掘調査を実施することになった。

本調査は、平成 17 年 2 月 17 日着手し、同年 5 月 17 日に終了した。本書はその内容を報告するものである。

２．調査の組織

調査委託　椛島　ウメ

調査主体　福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

教　育　長　　植木とみ子（現任）　生田　征生（前任）

文化財部長　　山崎　純男（現任）

試掘担当　埋蔵文化財課事前審査係（現 埋蔵文化財第 1 課事前審査係）

係　　長　　濱石　哲也（現任）

担　　当　　本田浩二郎（現任）

調査担当　埋蔵文化財課調査第 1 係（現 埋蔵文化財第 2 課調査第 1 係）

課　　長　　山口　譲治（現 埋蔵文化財第 1 課長）

係　　長　　田中　壽夫（前任）　池崎　譲二（現 埋蔵文化財第 2 課調査第 1 係長）

担　　当　　松浦一之介

庶務担当　文化財整備課

課　　長　　榎本　芳治（現 文化財管理課長）

管 理 係 長　　市坪　敏郎（前任）　栗須ひろ子（現任）

管　理　係　　後藤　泰子

調査協力　副島　邦弘（九州歴史資料館）　日高　正幸（東峰村教育委員会）

山村　信榮（太宰府市教育委員会）　亀井　味楽（高取焼味楽窯 15 代）

尚、発掘調査から報告書作成に至るまで、椛島ウメ氏をはじめ、高取地区の地域住民等関係各位には多大なご協力とご理解をいただいた。記して謝意を表する次第である。

第２章　遺跡の立地と歴史的環境

藤崎遺跡は、早良（さわら）平野北部の砂丘上に立地し、東西約 400 m、南北約 600 mの範囲に広がる。明治 45 年に発見され、弥生時代から古墳時代にかけての甕棺墓や石棺墓群は著名で、中・近世に及ぶ複合遺跡である。本書で報告する第 35 次調査地点は、遺跡南東部の紅葉山（標高約 30 m）北麓に位置する近世高取焼の窯業関連施設である。

高取焼の歴史は、既に他の美術書や報告書に詳しく、紙面の都合もあり割愛し、本章では西皿山に至る迄の高取焼の変遷を概述するに留める。

高取焼は、文禄・慶長の役の際、朝鮮に出陣した黒田如水、長政父子が井戸の陶工八山（はちざん）家族３名を本国に渡海させたことに始まる。慶長５年(1600)、長政の筑前移封に伴い八山は鞍手（くらて）郡鷹取山山麓で瓷器を製し、高取八蔵と改名した。八蔵が筑前で最初に開窯したのは、直方市鷹取山南麓の永満寺宅間（えいまんじたくま）窯と考えられており、昭和 58 年に発掘調査された。操業年代は慶長 11 年（1606）～同 19 年(1614)の８年間と推定されている。全長 16.6 mが遺存し、半地山式の割竹型登窯で６室を有していたと推定される。碗、皿、鉢、片口、擂鉢等の日常雑器を主に焼成した。

同 19 年（1614）、御焼物所は同郡内ヶ磯（うちがいそ）に引き移された。内ヶ磯窯は 1979 年から 81 年にかけて３次にわたる発掘調査が実施され、現在はダムに水没している。全長 46.5 m、15 室の半地下式階段状連房登窯と判明した。甕、瓶、片口、擂鉢等の日常雑器の他、茶入、水指、碗、皿等の茶道具片が多量に出土している。内ヶ磯の操業時期に、八蔵父子は伏見の小堀遠州の許に派遣され、遠州好みの茶器の指導を受けている。内ヶ磯までの高取は、桃山様式の『古高取』と呼ばれる。

長政が卒した元和９年(1623)、八蔵は帰国を願い出て２代忠之の勘気に触れ、嘉麻（かま）郡山田村に蟄

窯　跡

1　西皿山
2　東皿山
3　荒戸新町窯
4　大鋸谷六反間窯（友泉亭御庭焼）
5　東松山窯（友泉亭御庭焼）
6　野間皿山
7　能古焼窯
8　須恵焼窯
9　犬鳴焼窯
10　山口浅ヶ谷窯
11　上畑窯
12　内ヶ磯窯
13　永満寺宅間窯
14　白旗山窯
15　千石窯
16　山田唐人谷窯
17　小石原鼓窯
18　小石原中野窯

採 土 場

19　志摩郡青木村（焼物目砂石）
20　志摩郡長垂山（焼物地土）
21　怡土郡飯場村（焼物薬石）
22　早良郡七隈村（焼物地土）
23　御笠郡向佐野村（焼物地土）
24　鞍手郡感田村（焼物地土）
25　穂波郡中村（焼物薬石）
26　穂波郡伊岐須村（焼物目砂石）
27　穂波郡九郎丸村（焼物薬石）
28　上座郡赤谷村（焼物薬石）

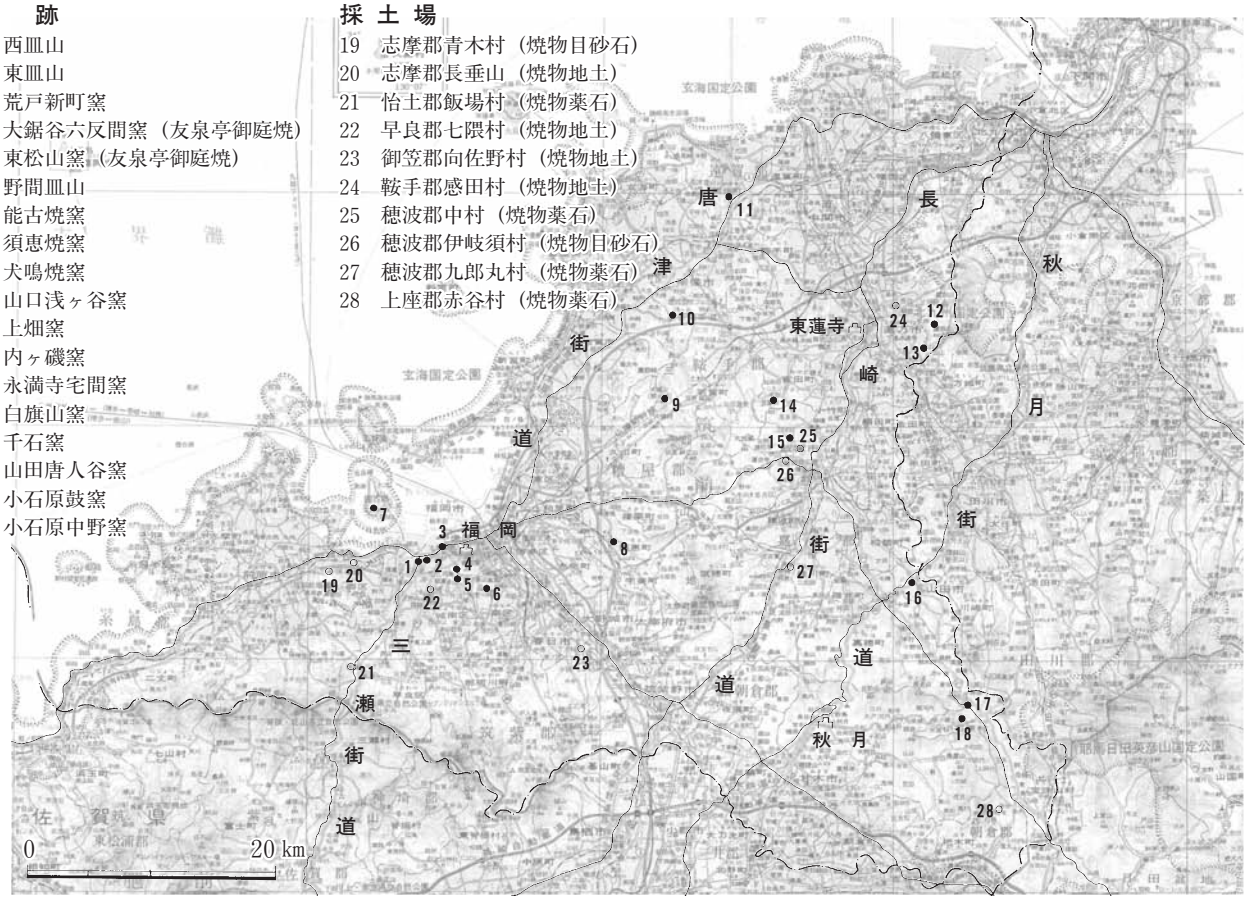


図１　筑前地方の近世窯業施設分布図（縮尺 1/600,000）

居、内ヶ磯は廃窯した。八蔵は少々の門弟と山田で私に製陶する。ここでの活動は、寛永７年(1630)に穂波郡合屋川内中村の白旗山北麓に御焼物所ができるまでの７ヶ年である。

白旗山では、水漉技術を導入し、器壁の薄い茶入等の製作に成功した。『綺麗さび』と呼ばれる遠州好みを反映し、一般に『遠州高取』と呼ばれている。ここでの操業は約35年間に及び、寛文５年(1665)には、上座郡鼓村に御焼物所が引き移される。その２年後には、同郡小石原村に売買用の新窯がなるが、このころ良土良薬の探索を行うと共に、既に陶器の大量生産を目論んでいたと推測されている。また、天和年間には、福岡城松之木坂櫓において、八蔵の孫、八之丞が細工物を製作、藩主の上覧に供し上座郡で焼成された。

貞享年間、御焼物所は早良郡田島村大鋸谷に引き移され、六反間窯、東松山窯での製陶が隆盛する。大鋸谷窯は、現在の福岡市中央区輝国一丁目18番地付近にあったと推定されるが、周辺の開発が進み、窯跡は壊滅している。大鋸谷窯は、田島村にあった藩主別墅の名を冠し、『友泉亭御庭焼』とも呼ばれ、細工物や鉄絵など多様な優品が制作された。代表的な陶工には、高取貞明、貞久、大休軒芳円などがあり、香炉や床置などの細工物をよくした。鉄絵を描いた『絵高取』は、狩野昌運や尾形友元等の御用絵師に絵付けさせている。また、画技に秀でた藩主綱政自身にも数点の遺作があり、製陶への並々ならぬ傾倒ぶりが窺える。しかし元禄17年（1704)、突如大鋸谷窯は取り崩され、以後13年の間、藩の製陶活動が休止した。この間、城下の荒戸新町（後の湊町）等に開窯されるが、試窯程度で終わっている。

享保元年(1726)、早良郡麁原村西新町上之山(上野山とも、現在の西新５丁目10番地付近)に御焼物所が仕立てられ、藩の窯業が本格的に再開した。翌年には開窯し、藩主宣政は自ら窯場を視察した。寛保元年（1741）には、紅葉山の北麓（現在の高取２丁目５・11番地付近)、に新たな窯が開かれ、日常雑器を中心に生産を続けた。

後者の旧字名は皿山であり、前者は東皿山（東山とも)、後者は西皿山（西山とも）と呼ばれる。いずれも唐津街道に近接し、更に後者は三瀬街道との結節点である。東皿山は茶道具を中心とした藩主の御用窯で、周辺では窯道具や陶片が採集で

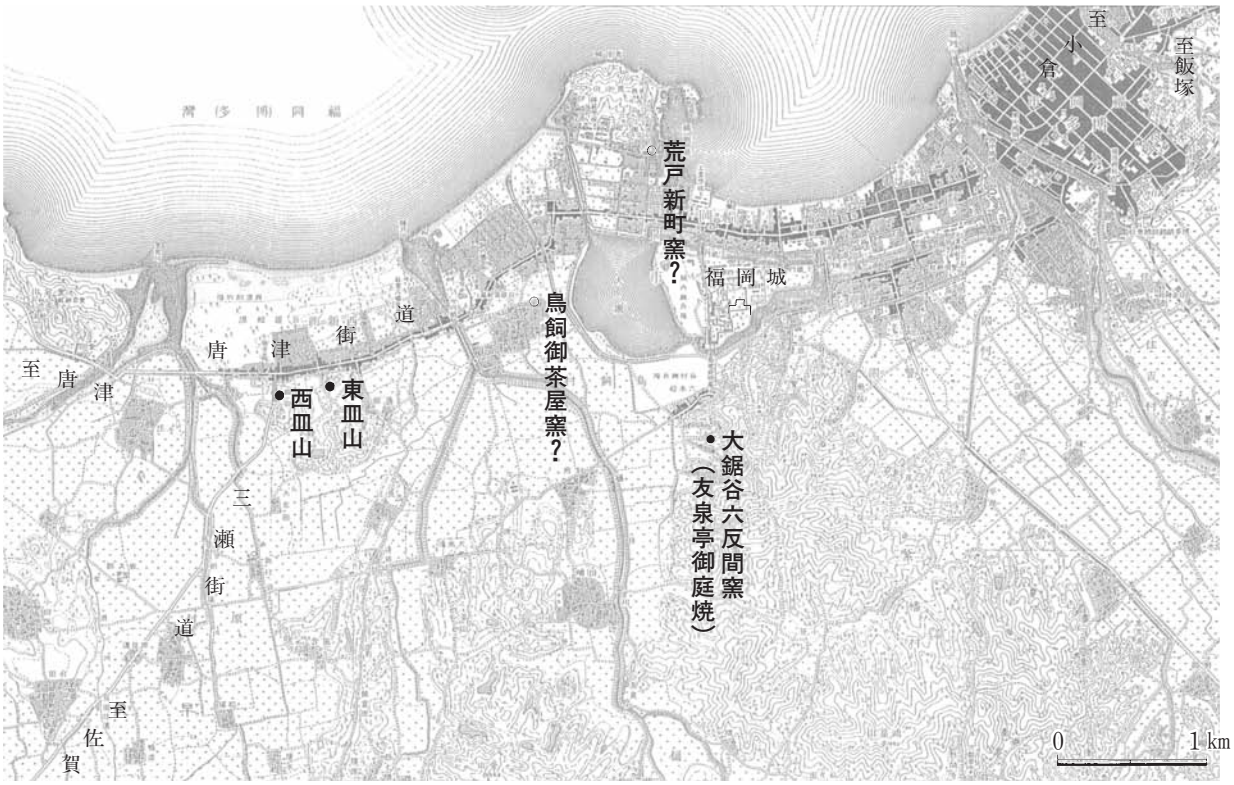
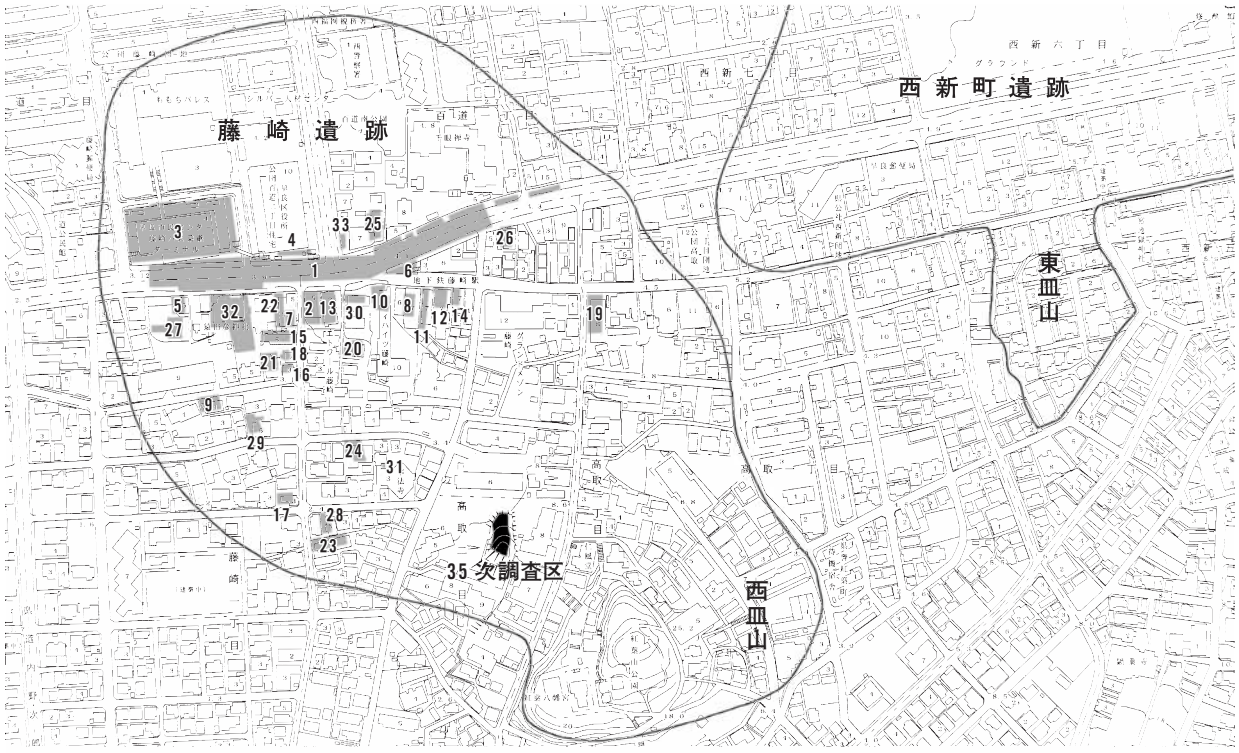


図２　福岡城下と周辺の窯跡分布図（縮尺1/50,000）

きるが、開発が進み窯跡は残存していないと考えられる。維新後は藩の庇護を失い廃窯した。

高取歴代記録によれば、西皿山の開窯は、藩士松山茂八を奉行とし、『商売窯』とよばれ、柳瀬氏が皿山頭取を世襲した。東皿山窯が大破した際には、御用品を西皿山で焼成したことが記されている。廃藩後、西皿山に関する史料のほとんどが散逸し、経営や生産品の流通などに関して不明な点が多い。近代以後は、茶器、酒器、火鉢、花瓶、植木鉢等の美術品の他、土管や耐酸陶器などを生産する窯もあった。現在では亀井味楽窯１軒のみが操業を続け、登窯１基が保存されている。



▲現　在

▲昭和初期頃

図３　藤崎遺跡調査区の位置と周辺環境（縮尺 1/6,000）

第３章　調査の記録

１．調査の概要

藤崎遺跡第35次調査地点は、福岡市早良区高取２丁目219－２外９筆に所在する。調査前の現況は山林で、標高は22.5～29ｍ程度を測り、南から北に向かって傾斜していた。紅葉山丘陵の一部にあたるが、周辺の開発によって周囲から切り離され、断崖状に切り立っていた。北側の平坦面には、かつて小堂宇があり、数箇所に地蔵や小祠が祀られていた。

試掘調査の結果、丘陵部全体に現地表から深さ約２～３ｍ前後の陶片堆積層があり、その下に黄褐色粘質土の整地面が確認された。これにより、周辺に窯体を含めた窯業施設が遺存しているものと判断され、平成17年２月17日から本調査を開始した。調査は現況の地形測量を行ったあと、図６に示したグリッドを設定し、表土剥ぎ及び陶片層の除去作業を人力で行った。調査工程上、重機による陶片堆積層の掘削を検討し、重機の搬入が可能となった同年３月16日以降、重機による掘削を開始した。掘削はグリッド毎に行い、陶片層を徐々に掘り下げ、作業員を投入して遺物を回収した。出土遺物は、基本的に上・中・下の３層と整地層内に分けて取り上げた。調査開始時点で、出土遺物の総量が900㎥を超えるものと推定され、収蔵能力の限界から選別して回収した。選別の基準は、器種の確認後、残存状況、出土量の稀少さなどの他、窯道具と釉着した陶片など窯内での焼成状況を示すものなどである。

陶片層の除去後、雛壇状の整地層を確認し、図化後、トレンチを設定し下層の状況を確認した。発掘調査は５月17日に終了した。

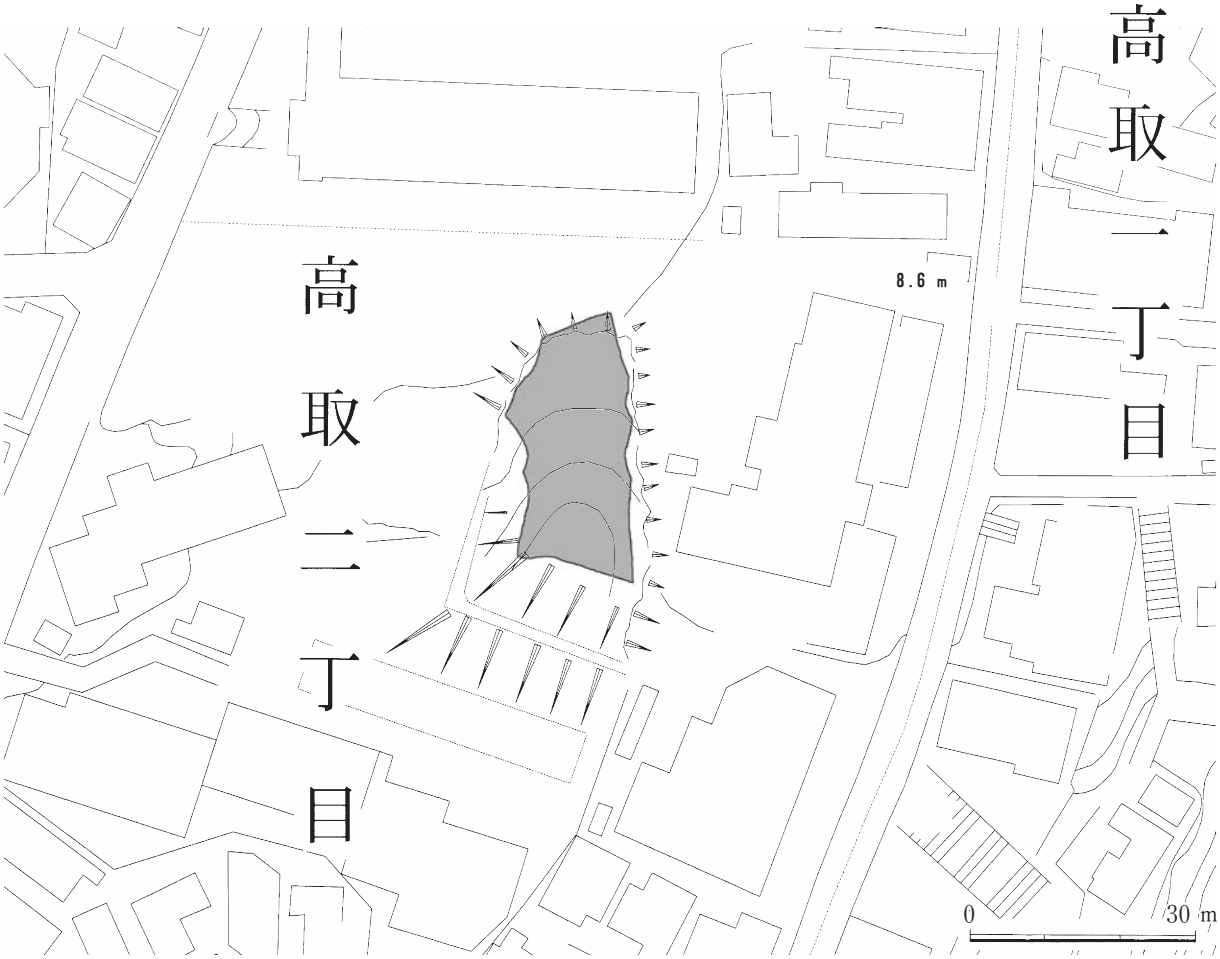
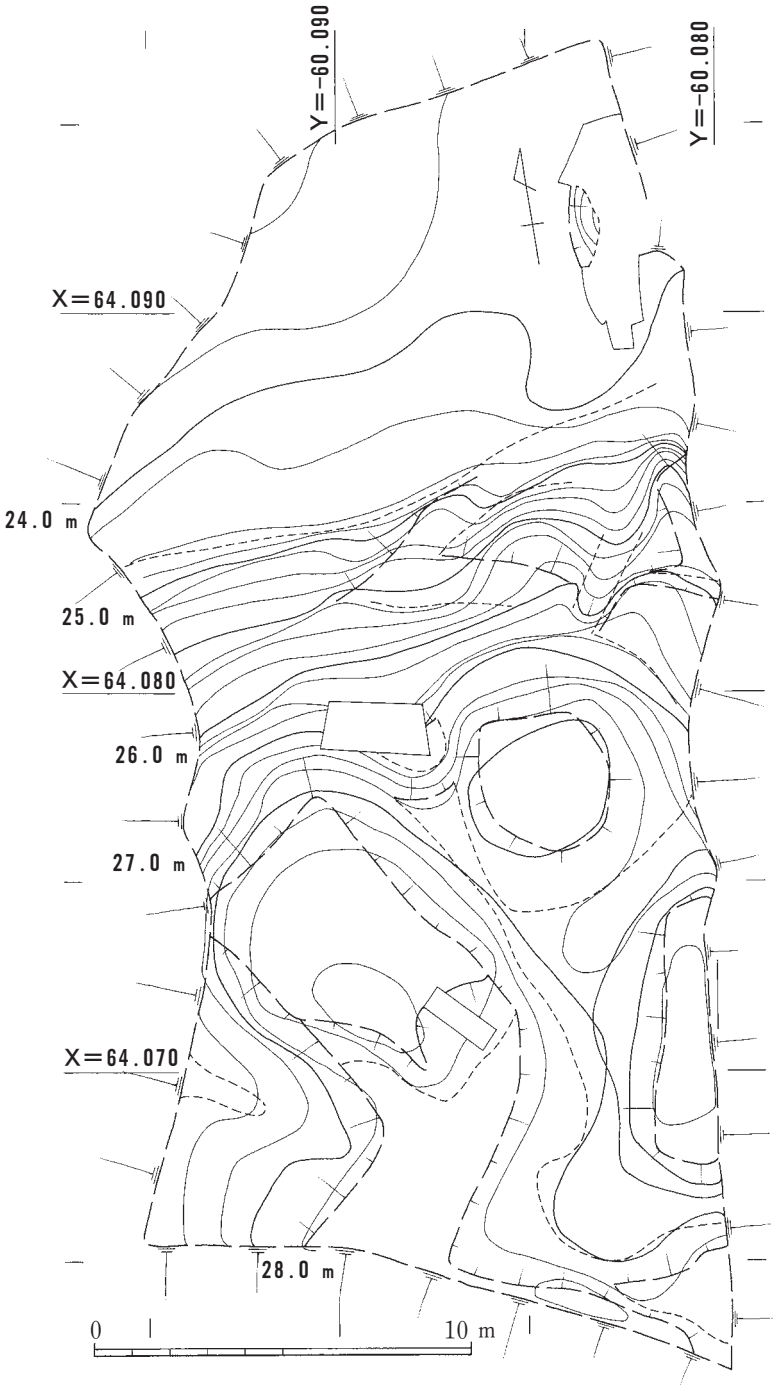


図４　第35次調査区位置図（縮尺1/1,000）

図 5　第 35 次地点現況（西から）



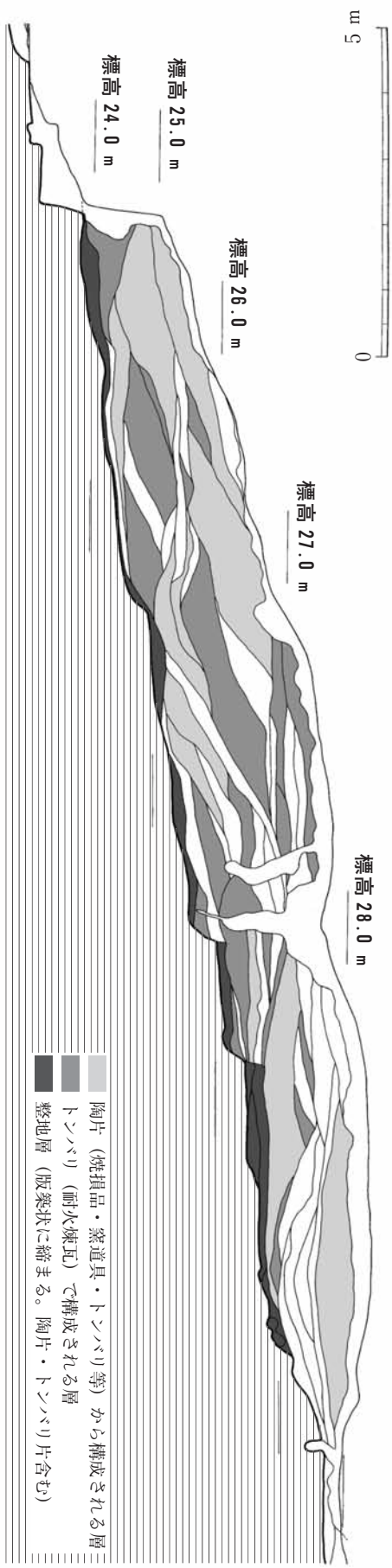


図 6　第 35 次地点現況測量図および調査区東壁陶片層土層図（縮尺 1/200、1/100）

図７　調査区東壁陶片層全景（北西から）

図８　調査区東壁陶片層部分（南西から）

図９　B-3 グリッド南壁陶片堆積状況（北から）

図 10　B-1 グリッド整地層上面遺物出土状況（南東から）

２．検出遺構

⑴　SX-01 整地層（図 11、13、14）

陶片層の直下で検出され、調査区全体に広がっている。造成以前の旧地形の傾斜に合わせて地山を雛壇状に整形し、陶片や窯道具片を含んだやや粘質の高い黄褐色砂質土を、厚さ 10～35 ㎝程度盛土して造成している。盛土は版築状に硬く叩き締められるが、部分的に地山が露出する箇所もある。整地面は、所々不整形だが、調査区内で９段が遺存し、概ね東西方向に整地され、南から北に向かって傾斜している。各段の幅は概ね 1.8 ｍ前後だが、最も広い箇所で幅約４ｍを測り、狭い箇所で１ｍに満たない。特に北側は、近年堂宇の建設時に地形が改変され、遺存状況は良好でない。整地層の平均的な勾配角は約 14°を測り、2.5 寸勾配に換算される。整地層検出後、写真及び測量による記録を作成した。その後、整地層下の遺構の有無を確認するため、幅１ｍ前後のトレンチを 11 本掘削したが、窯体は確認されなかった。

⑵　SX-02 埋納遺構（図 11、12、15、16）

C-04 グリッドの整地層内から検出された陶器埋納遺構である。整地層下の遺構を確認する目的で設定したトレンチの掘削段階で検出された。整地面及び土層観察からも、これに伴う掘方が確認されず、整地と共に埋置されたものと考えられる。埋納遺構はまず、丘陵を地山整形した後、図 11 に示した４層まで茶褐色や暗等褐色等の砂質土で厚さ 25 ㎝程度盛土する。その後、擂鉢（144）で蓋をした甕(147)を、整地層の傾斜にあわせて置き、更に黄褐色系の砂質土で厚さ 25 ㎝程度盛土して被覆していた。使用される土器はいずれも素焼きの完形品である。また甕の内部から、１羽分の鶏骨が検出された。骨には鋭利な刃物の痕跡が確認されたが、切断された鶏肉を納めたのか、骨のみを納めたのかは明確にできない。

検出状況から、整地に伴う何らかの祭祀や鎮壇に関係する施設とも推定されるが、現在のところその性格を明確にできない。

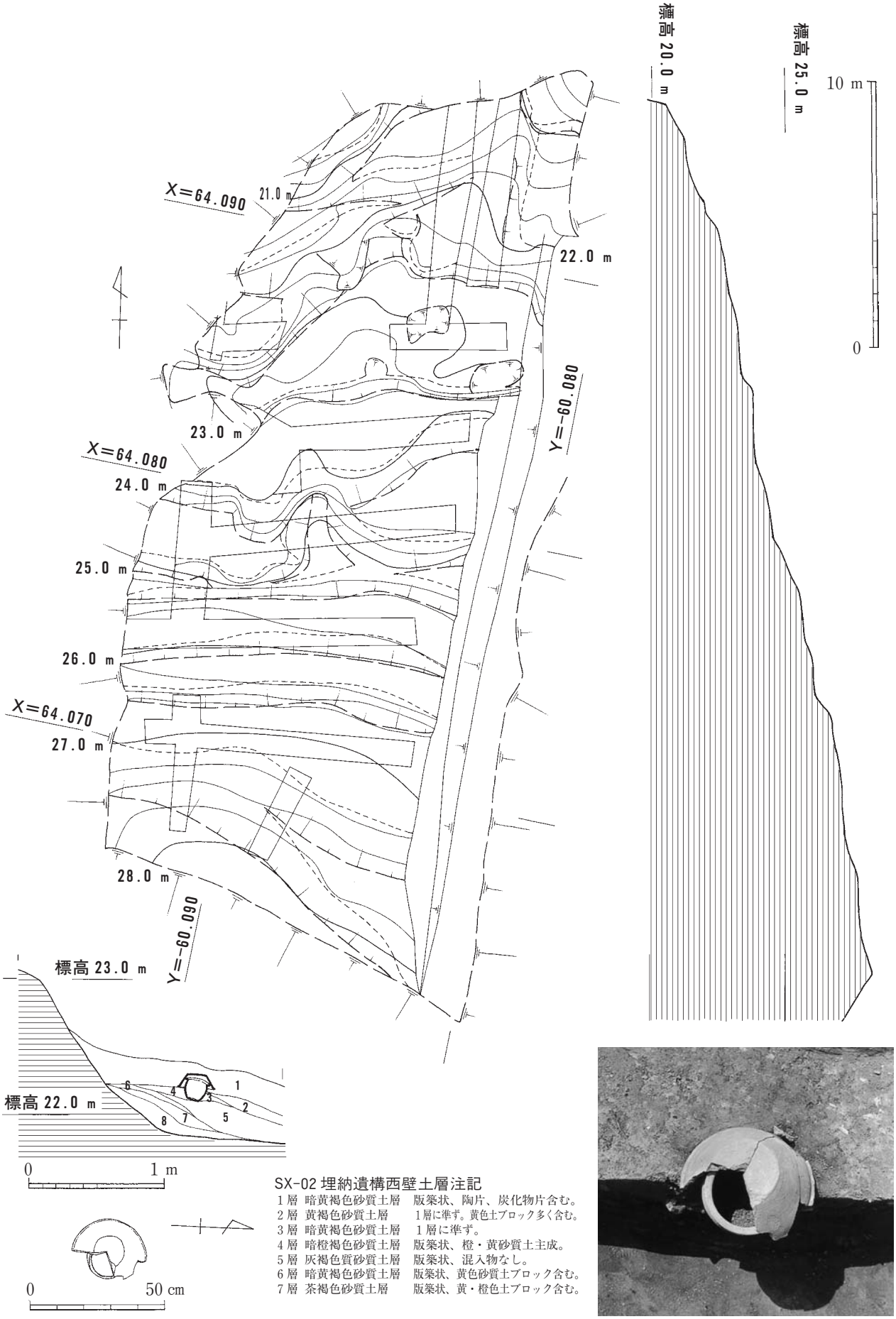


図 11　整地層 SX-01 及び埋納遺構 SX-02 実測図（縮尺 1/200、1/40、1/20）

図 12　埋納遺構 SX-02 検出状況（東から俯瞰）

図 13　整地層 SX-01 全景（西から）

図 14　整地層 SX-01 全景（北から）

図 15　埋納遺構 SX-02 検出状況（東から）

図 16　埋納遺構 SX-02 鳥骨出土状況（東から俯瞰）

３．出土遺物

陶片層から膨大な量の廃棄された焼損品や窯道具が出土した。出土層位によって編年が追えるものでないため出土したグリッド名及び層位は記述していない。特に整地層直上及び整地層内から出土したもののみ出土位置を記述した。

出土した器種には、食器類（皿、鉢、向付、丼など）、飲器類(茶碗、吸出茶碗、急須、水注、片口碗猪口、盃、徳利、銚子など)、容器(瓶、振出)、照明具(秉燭、灯明皿、油差、油壺など)、神仏具(瓶子、香炉、仏飯具、花入、稲荷社など)、炊事・調理用具(甕、壺、鍋、擂鉢、片口、卸など)、貯蔵用具（甕、壺、樽など)、暖房具（手焙、火鉢など)、洗面具（盥、手水鉢など)、文房具（陶硯、水滴など)、合子、置物、園芸用品（植木鉢)、喫煙用具（火入)、衛生用品（便器、尿瓶など)、生産具（漁錘）などきわめて多岐にわたる。また、土管や井戸ポンプなどがあるが、これらは近代の所産と考えられる。このほか、器種を明らかにできない未成品がかなり存在する。

窯道具は紙面の都合上図示していないが、トンバリ（耐火煉瓦)、トンパン（陶板)、トチン（陶枕)、ハマ、匣、チャツなどが多量に出土した。

小　　皿（１～14、18～24）

１～14 は型物の小皿である。胎土は精良で、黒色細粒を含む。**１** は直径 9.3 ㎝、器高 1.8 ㎝、底径 5.3 ㎝。内輪に 16 弁、外輪に 32 弁の菊文を描く。底部は施釉後掻き取り露胎、焼成不良で釉の発色が悪く釉種不明。**２** は直径 9.4 ㎝、器高 2.1 ㎝、底径 4.8 ㎝。内・外輪に 13 弁の菊文を描く。外輪の弁１箇所に小円文がある。体部外器面に箆削り。素焼きの段階で廃棄される。**３** は直径 8.6 ㎝、器高 1.7 ㎝、底径 4.3 ㎝。見込みに５弁の撫子文、体部四方に内側に向き合った蕨手状の文様を描きその内側に格子文を配す。体部外器面に箆削り。高宮釉を施釉し、色調はベージュ。底部は施釉後掻き取り露胎。**４** は直径 8.9 ㎝、器高 2.4 ㎝、底径 4.4 ㎝で、５弁の桜文を描く。体部外器面に箆削り。布羅志釉を施釉し、色調は狐色。底部は施釉後掻き取り露胎。口縁部に重ね焼痕がある。A-07 グリッド整地層直上から出土。**５** は直径 8.0 ㎝、器高 1.8 ㎝、底径 3.5 ㎝程度に復元され、５弁の梅文を象る。体部外器面に箆削り。器面全体に銅化釉を施釉後、口縁部に藁白釉。色調はオリーブ～青みの白。底部は施釉後掻き取り露胎。**６** は直径 8.4 ㎝、器高 1.75 ㎝、底径 4.4 ㎝に復元。見込みに「壽」字を陽刻し、体部に 16 弁に復元される花弁文を配す。体部外器面に箆削り。高宮釉を施釉し、色調はベージュ。底部は施釉後掻き取り露胎。口縁部に重ね焼痕がある。**７** は幅 8.5 ㎝、器高 2.25 ㎝を測る天狗の団扇形小皿。体部外器面は手持ち箆削り。高宮釉を施釉し、色調はベージュ。底部は施釉後掻き取り露胎。**８** は残存高 8.25 ㎝の扇形小皿。扇面に五分咲き程度の梅枝文と宝珠を陰刻する。高宮釉を施釉し、色調は芥子色～黒茶。底部は露胎。**９～11** は魚形小皿で、長さ 13.9 ㎝程度に復元される。同笵と考えられるが焼成時の収縮率が異なると考えられる。体部には銀杏の葉状の鱗があり、尾鰭が二股に分かれる。外器面は横方向の箆削りを施す。高宮釉を施釉し、色調はベージュ～オリーブグリーン。底部は露胎。**12** は長軸幅 10.1 ㎝、短軸幅 7.2 ㎝、器高 1.8 ㎝程度に復元される 20 弁の菊花菱形を呈す。体部外器面に箆削り。口縁部は更に箆状工具で整形。布羅志釉を施釉し、色調は狐色～明灰色。底部は施釉後掻き取り露胎。別個体で黄釉を施釉するものもある。**13** は残存長 9.9 ㎝で、柏葉形を呈す。体部外器面に横方向の箆削り。高宮釉を施釉し、色調はベージュ～黄みの暗灰色。底部は露胎。**14** は残存幅 9.6 ㎝、短軸幅 7.4 ㎝、器高 2.2 ㎝を測り、鮑形を呈す。体部外器面に手持ち箆削り。外器面には銅化釉、内器面には全面に高宮釉を施釉した後、極めて部分的に藁白釉を施釉。色調はココナッツブラウン～芥子色。底部は露胎。整地層からも同形のものが出土。**18** は直径 10.5 ㎝、器高 2.8 ㎝、底径 6.4 ㎝。口縁部は緩やかに外反。見込みは刷毛目ナデ、３脚のハマ痕がある。外器面底部に箆削り。器面全体に高宮釉、内器面体部に非常に薄い白釉を施釉。色調はベージュ。底部は施釉後

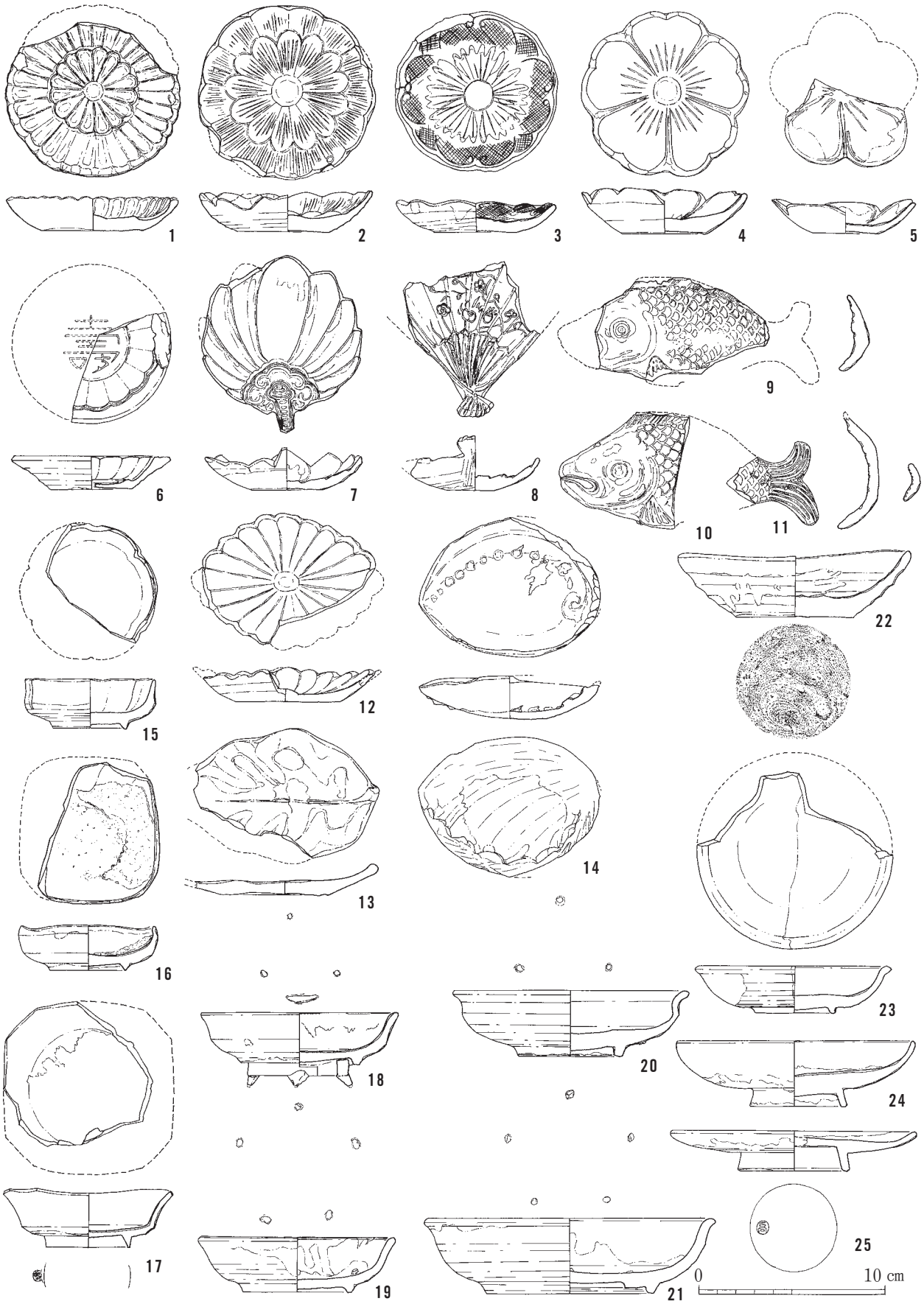


図 17　小皿・托等実測図（縮尺 1/3）

掻き取り露胎。底部に径5.3㎝の3脚ハマが付着。**19**は直径10.7㎝、器高2.95㎝、底径5.9㎝。口縁部は緩やかに外反。見込みに5脚のやや高いハマ脚痕がある。外器面下半に篦削り。器面全体に高宮釉、体部に薄い藁白釉を施釉。色調はベージュ～青みの白。底部は施釉後掻き取り露胎。**20**は直径12.6㎝、器高3.5㎝、底径5.6㎝に復元。口縁部は斜め上方に外反。見込みに回転篦削りを施し、3脚のハマ脚痕がある。外器面下半に篦削り。器面全体に高宮釉を施釉、色調はベージュ。畳付のみ露胎。底部に別個体の口縁部が付着し、重ね焼きの痕跡と考えられる。**21**は直径15.6㎝、器高4.1㎝、底径9.0㎝。口縁端部は僅かに外反。見込みに5脚のハマ脚痕がある。外器面に篦削り。器面全体に高宮釉、口縁部から内器面体部に藁白釉を施釉、色調はベージュ～青みの白。底部は施釉後底部掻き取り露胎で、蛇の目状を呈す。**22**は直径12.4㎝、器高3.6㎝、底径6.4㎝に復元。胎土は粗く、白・黒色粗砂を多く含みやや不整形。体部に黄釉、口縁部に飴釉を施釉、色調は黄土色～ココナッツブラウン。底部は糸切で露胎。**23**は直径10.5㎝、器高2.5㎝、底径4.4㎝。内器面は藁白釉と飴釉と考えられる極めて薄い（もしくは施釉後掻き取り）釉薬を掛け分ける。外器面には内器面の釉に加え高宮釉の3種を掛け分ける。色調は海老茶、明灰色、ベージュ。畳付のみ露胎。**24**は直径13.0㎝、器高3.5㎝、底径5.1～5.4㎝の皿もしくは蓋もしくは托と考えられる。底部下半に篦削り。器面全体に高宮釉、見込み及び外器面の腰部付近に藁白釉を施釉し、畳付のみ掻き取り露胎。色調はにぶい黄緑色～青みの白。

小　　鉢（15～17）

15は直径7.2㎝、器高2.6㎝、底径3.8㎝に復元される稜花小鉢。轆轤で成形後、体部6箇所を篦状工具で押さえ、見込みに回転篦ナデを施す。外器面底部に篦削り。器面全体に布羅志釉を施釉し、色調は狐色。底部は施釉後掻き取り露胎。**16**は幅7.8㎝、器高2.5㎝、底径4.0㎝に復元される方形小鉢。轆轤で成形後、体部四方を押さえ成形。外器面底部に篦削り。器面全体に高宮釉を施釉し、色調はベージュ。畳付のみ露胎。内器面に多量の砂が付着。**17**は幅9.1～9.2㎝、器高3.1㎝、底径4.5㎝に復元される八角小鉢。轆轤成形後、篦状工具で八角形に成形。口縁部は丁寧に面取りする。器壁が薄く、胎土は非常に精良。外器面底部に篦削りを施し露胎。器面全体に黄釉を施釉し、色調は黄土色～金茶。底部高台外に㊐印を押す。目跡・ハマ痕もなく優品と考えられる。

托（25）

25は直径13.2㎝、器高2.1㎝、底径6.0㎝。口縁部はあまり立ち上がらない。内器面から口縁部にかけて藁白釉を施釉、色調は黄みの明灰色。外器面下半は篦削り。底部下半に篦削りを施し銅化釉を施釉、色調は金茶～飴色。高台内側に㊐印を押す。畳付のみ露胎。重ね焼きの痕跡等は認められず、優品と考えられる。

向　　付（26、27）

26は横幅17.0㎝、縦幅12.3㎝、器高6.2㎝程度に復元される。轆轤成形し外器面に篦削りを施した後、両端部を内側に折り曲げる。器面全体に銅化釉（＋飴釉か）を施釉し、色調は飴色～赤みの灰色。畳付のみ露胎。生地を幾度となく捏ねており、焼成時にできた気泡が目立つ。**27**は横幅16.3㎝、器高3.4㎝程度に復元される型物の紅葉形向付。内器面には飴釉、口縁部から外器面にかけては黄釉を施釉し、色調は飴色～黄土色。小脚が付き、脚端部のみ露胎。

鉢（28、29、31、33、34）

28は直径25.2㎝、器高8.5㎝、底径13.0㎝に復元。見込みにハマ脚痕があるが数は不明。口縁部は僅かに外反し、外器面全体に篦削り。外器面には高宮釉を施釉し、部分的に飴釉をごく薄く施釉。内器面は高宮釉・飴釉・藁白釉の3種を掛け分ける。底部は施釉後掻き取り露胎。**29**は直径18.4㎝、器高6.9㎝、底径9.0㎝に復元。見込みにハマ脚痕があるが数は不明。口縁部は僅かに外反し、外器面全体に篦削り。器面全体に飴釉、口縁部に高宮釉を施釉。色調は飴色～ベージュ。底部は施釉後掻き取り露胎。**31**は横幅24.0㎝、縦幅17.0㎝、器高5.5㎝程度に復元される型物の花菱

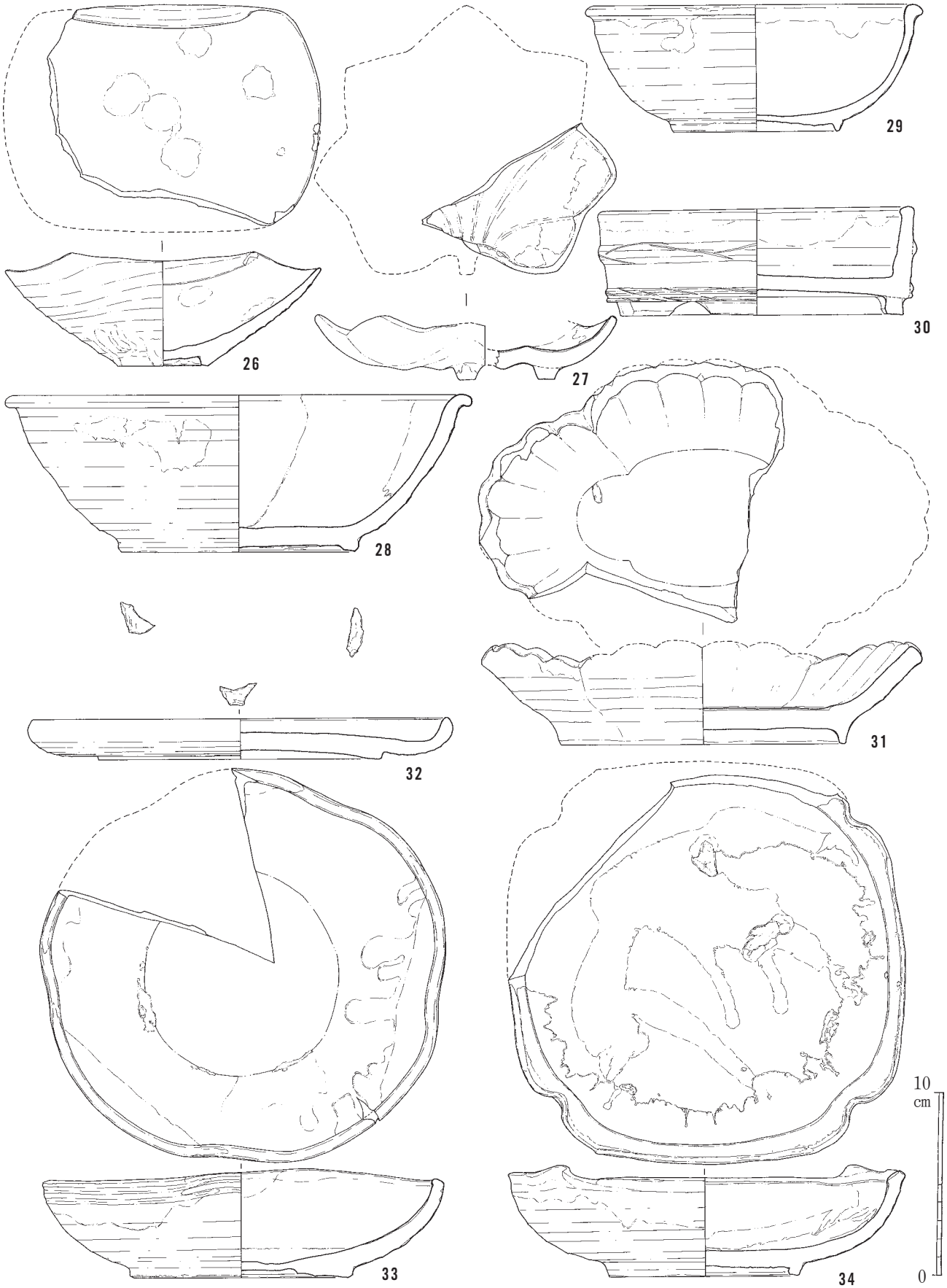


図 18　盤・鉢・向付等実測図（縮尺 1/3）

形鉢。花弁数は28弁に復元され、外器面には手持ち篦削りを施す。外器面に飴釉、口縁部～内器面にかけては高宮釉を施釉。色調は飴色～にぶい緑みの黄。畳付のみ露胎。**33**は最大径22.0㎝、器高5.9㎝、底径12.0㎝。梅鉢形を呈するが、形状は明瞭でない。轆轤成形後、5箇所を指頭で押圧する。体部は緩やかに立ち上がり口縁端部は内側に短く突出。口縁部の外器面には2条の凹線を施す。内・外器面に飴釉を施し、口縁部3箇所に藁白釉を掛け分ける。色調はココナッツブラウン～緑みの白。見込みは、砂目の内側を掻き取り露胎。底部は蛇の目高台で露胎。**34**は復元幅21.6㎝、器高6.0㎝、底径10.4㎝。轆轤成形後、4箇所を指頭で押圧し、各辺の口縁部を篦状工具で僅かに切り取り成形する。口唇部から内器面にかけて明瞭な稜が付く。外器面に篦削り。全面に飴釉を施釉後、口縁部に藁白釉を施釉。見込みは藁白釉を掛け流し文様を描く。見込みに目跡がある。色調は赤みの暗灰色～生成色～青みの白。底部は施釉後に掻き取り露胎。

盤（32）

32は直径23.0㎝、器高2.2㎝、底径15.3㎝。見込みに目跡（6箇所に復元）がある。口縁部は短く立ち上がり、外器面に篦削りを施し、底部付近には飛び鉋痕が認められる。器面全体に極めて薄く施釉し、灰みの赤褐色～黒茶に発色。底部は露胎で焼成時の砂が付着する。

盥（30）

30は直径17.2㎝、器高5.9㎝に復元される結物形盥。轆轤成形後、逆台形の脚を3箇所に貼り付け、篦状工具で整形。体部中央に1箇所、底部に2箇所の箍を粘土紐で貼り付ける。体部全体に高宮釉、口縁部は藁白釉、底部は脚部を除き露胎。色調はメロンイエロー～オパールグリーン。

振　　出（35～37）

35は胴部最大径4.8㎝、残存高5.3㎝、底径3.0㎝。器壁薄く、胎土非常に精良。外器面に飴釉を施釉、底部糸切で露胎。**36**は胴部最大径5.1㎝、器高6.4㎝、口径2.1㎝、底径3.1㎝。胴部5箇所を押圧。外器面全面に飴釉を施釉後、部分的に黄釉を掛けて垂れを作り正面とする。底部糸切で露胎。**37**は胴部最大径5.2㎝、器高7.0㎝、口径1.7㎝、底径2.8㎝。瓢形を呈し、胴部上半を両側から工具で押圧。外器面に極めて薄い飴釉を施釉。底部糸切で露胎、砂が多量に付着。

蓋（38～43）

38は口径5.4㎝、器高1.9㎝、高台径3.2㎝。下面は篦削りを施し露胎。上面には高宮釉を施釉し、豆状の摘みが付く。**39**は口径7.5㎝、器高2.3㎝、底径3.8㎝の落とし蓋。下面は篦削り後にナデを施し露胎。上面には高宮釉を施釉し、色調は黄丹～飴色。摘みはない。**40**は口径9.2㎝、器高2.5㎝、底径4.4㎝の落とし蓋。下面は篦削りを施し露胎。上面は施釉され、強い黄みの橙に発色。見込みには扁平な釦状の摘みが付く。**41**は口径8.4㎝、器高4.1㎝、高台径6.0㎝。下面は篦削りを施し露胎。上面には扁平な球形の摘みが付き、手前に梅又は椿状の花文を鉄絵で描き、更にその上面に刷毛で灰色化粧土を轆轤回転させながら塗布。上面には高宮釉を施釉し、色調は鶯茶。**42**は口径9.1㎝、器高3.9㎝、高台径7.1㎝。下面は篦削りの後ナデを施し露胎。上面に扁平な球形の摘みが付き、花文と思しき極めて簡略化された文様を鉄絵で描く。更にその上面に刷毛で白色化粧土を“ハ”字状に塗布。上面に布羅志釉を施釉。**43**は口径10.6㎝、器高4.3㎝、高台径8.0㎝。下面は篦削りの後ナデを施し露胎。上面に扁平な球形の摘みが付き、花文と推測される極めて簡略化された文様をイッチン掛けで施文。布羅志釉を施釉し、色調はベージュ～明灰黄色。

猪　　口（44～48）

44は口径5.8㎝、器高2.75㎝、底径2.1㎝。下半～高台にかけて篦削り。高台は露胎で㊞印を押す。外器面に、黒釉、布羅志釉、そして飴釉と考えられるローズグレイに発色する釉薬を1/3ずつ掛け分ける。**45**は口径5.6㎝で高台が欠損。高台は露胎で㊞印を押す。内・外器面に緑青釉を施釉、色調は白緑色。見込みには黒釉を施釉。B-01グリッド整地層出土。**46**は口径6.2㎝、器高4.6㎝、底径3.6㎝に復元。底部付近には篦削りを施し、

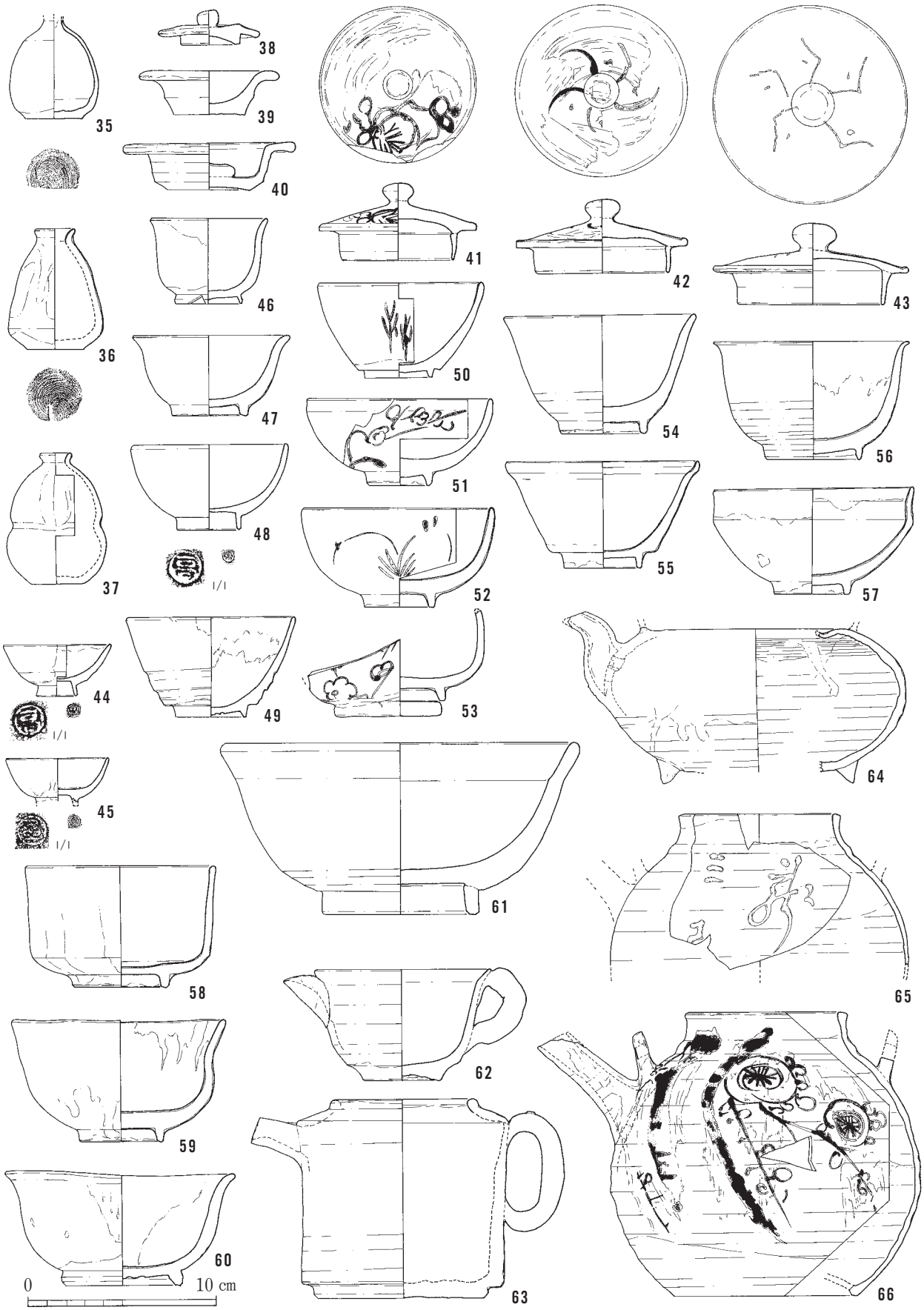


図 19　碗・急須・蓋等実測図（縮尺 1/3）

露胎で切高台。内･外器面ともに布羅志釉を施釉、色調は黄みの明灰色。口縁部１箇所に藁白釉を掛け、正面とする。**47** は口径 8.4 ㎝、器高 4.3 ㎝、底径 4.0 ㎝。口縁部がやや外反。器面全体に高宮釉を施釉、発色不良。畳付のみ露胎。B-01 グリッド整地層出土。**48** は口径 8.3 ㎝、器高 4.5 ㎝、底径 3.3 ㎝の素焼品。高台は細く篦削りし、内に㊞印を押す。器面はナデ調整。

吸出茶碗（49～57）

49 は口径 9.0 ㎝、器高 5.3 ㎝、底径 3.8 ㎝に復元。体部は直線的に外反し、下半～底部にやや深い篦削りを施し高台を作る。内・外器面に藁白釉を施釉、口縁部～内器面上半に高宮釉を施釉。色調は生成～ベージュ。**50** は口径 8.9 ㎝、器高 5.05 ㎝、底径 3.6 ㎝。体部はやや内湾的に外反し、底部は篦で高台を削り出し露胎。焼成は軟質。正面に簡易な草文２本を鉄絵で描く。内・外器面に布羅志釉を施釉、色調は鳥の子色。**51** は口径 9.8 ㎝、器高 4.7 ㎝、底径 3.5 ㎝に復元。正面に簡略化した梅枝文を鉄絵で描く。背面にも絵があるが文様は不明。畳付のみ露胎で全面に白釉を施釉、色調は青みの白。A-01 グリッド整地層出土。**52** は口径 10.3 ㎝、器高 5.3 ㎝、底径 3.8 ㎝。体部の前後に蘭及び笹と考えられる簡略化した文様を呉須で描く。畳付のみ露胎で目跡がある。全面に高宮釉を施釉し、色調はベージュ。B-01 グリッド整地層出土。**53** は底径 4.8 ㎝。窯内の高温に耐えられず形状が崩壊しハマと釉着。体部に簡略化した梅枝文を呉須で描く。畳付のみ露胎でチョコレートエッヂ。全面に白釉を施釉し、色調は青みの白。A-01 グリッド整地層出土。**54** は口径 10.2 ㎝、器高 6.3 ㎝、底径 4.6 ㎝。口縁部は外反気味、底部付近に篦削りを施す。畳付のみ露胎で砂目跡がある。全面に高宮釉を施釉し、色調ベージュ、細かい嵌入がある。**55** は口径 10.4 ㎝、器高 5.7 ㎝、底径 4.2 ㎝。体部は直線的に立ち上がり、口縁部に緩やかな段が付く。高台は露胎でチョコレートボトム。全面に藁白釉をやや厚く施釉し、色調はベージュ～明灰黄色。**56** は口径 10.6 ㎝、器高 6.3 ㎝、底径 5.2 ㎝に復元。体部は丸みを帯び、口縁部が外反。体部下半～底部に篦削りを施し、畳付のみ露胎。全面に高宮釉を施釉した後、内器面下半に藁白釉を施釉。色調は芥子色～緑みの白。**57** は口径 10.8 ㎝、器高 5.7 ㎝、底径 4.2 ㎝。口縁部は捻り返す。畳付のみ露胎。全面に高宮釉を施釉した後、口縁部に藁白釉を施釉。発色は不透明。A-01 グリッド整地層出土。

碗（58～60）

58 は口径 10.1 ㎝、器高 6.5 ㎝、底径 4.8 ㎝に復元される半筒茶碗。体部は直線的に立ち上がり、下半～底部には篦削りを施す。畳付のみ露胎。全面に飴釉を施釉した後、内・外器面に黄釉の垂れがある。色調はココナッツブラウン～生成・黄土色。B-02 グリッド整地層出土。**59** は口径 12.0 ㎝、器高 6.5 ㎝、底径 4.4 ㎝。体部は直線的に外反しながら立ち上がり、側面１箇所を指頭押圧して凹ませる。畳付のみ露胎。内器面には藁白釉、外器面には飴釉を施釉した後、高宮釉を部分的に垂らす。発色良好で光沢がある。**60** は口径 12.2 ㎝、器高 6.2 ㎝、底径 6.4 ㎝。口縁部がやや外反。底部は篦削りで高台を作り、露胎。内・外器面に高宮釉を施釉し、外器面及び内器面の正面に藁白釉を垂らす。釉調透明で光沢がある。

丼（61）

61 は口径 19.0 ㎝、器高 9.1 ㎝、底径 8.3 ㎝に復元される素焼品。内器面上端部付近に明確な稜が付き、口縁部が外反し受部となる。外器面下半に篦削り。高台は貼り付け、内側に㊞印を押す。胎土精良。B-01 グリッド整地層出土。

把手付片口碗（62）

62 は口径 9.3 ㎝、器高 5.9 ㎝、底径 4.2 ㎝。外器面に篦削り。口縁部１箇所を篦状工具で切り粘土板で片口を付け、その正反対に４箇所を指頭押圧した粘土紐を付け把手とする。内器面に藁白釉、外器面に銅化釉を施釉。底部は露胎。

水　　注（63）

63 は口径 7.6 ㎝、器高 10.6 ㎝、胴部最大径 10.7 ㎝、底径 8.8 ㎝。胴部は円柱状で外器面に篦削り。口縁部は内傾し端部丸みを帯び露胎。胴部上端に断面 U 字形の短く直線的な注口を付け、反対側に

粘土紐を曲げた把手を付ける。全面に高宮釉を施釉。底部平底で施釉後掻き取り露胎。

急　須（64～66）

64 は胴部最大径16.0㎝程度に復元。胴部は扁平な球形で、外器面に篦削り。肩部から口縁部が緩やかに垂れ下がり、端部は僅かに返る。注口は短い逆Ｓ字状を呈し、漉部の透かしは三ツ星形。脚は短い円錐形で３脚と推定される。外器面上半～中央に藁白釉を施釉、色調は明灰黄色。底部は露胎。内器面に飴釉と推定される茶褐色の釉を施し掻き取る。**65** は口径8.5㎝、胴部最大径16.0㎝程度に復元。胴部は球形と考えられ、器壁は２～３㎜と薄い。口縁部は短く立ち上がり施釉後掻き取られ露胎。外器面にはイッチン掛けで「新」、「ミ」又は「三」等の文字を草書で書き、布羅志釉を施釉。内器面下半には薄く高宮釉を施釉。**66** は口径8.6㎝、器高15.1㎝、胴部最大径26.6㎝、底径9.8㎝に復元。胴部球形で、頸部は僅かな突帯状に膨らみ口縁部は短く立ち上がる。器壁は２～３㎜と薄い。外器面には非常に簡略化された梅枝文と考えられる花文を鉄絵で描き、その上から白色化粧土を刷毛で縦方向に塗布。注口はやや長めの直線的な円管状で、漉部の透かしは逆三ツ星形。注口の直上に逆Ｕ字形で円孔をもった吊手掛けが付く。外器面には布羅志釉を施釉し、銀鼠色に発色。内器面上半は布羅志釉、下半は高宮釉を薄く施釉。底部は上げ底で露胎と考えられる。

銚　子（67～72）

67 は残存高13.1㎝、胴部最大径7.0㎝、底径5.6㎝の１合銚子。胴部は円錐形で、頸部は方形。底部は平底に近く、露胎で㊞印を押す。器面に薄く高宮釉を施釉し、色調はベージュ。**68** は口幅2.8㎝、器高14.1㎝、胴部最大径6.6㎝、底径4.8㎝の１合銚子。胴部が膨らみ、下方で最大径をもつ。口縁部は方形で、直線的に外反。底部を篦削りし碁笥底。高台内に㊞印を押す。高宮釉と考えられる釉が分厚く掛けられるが、部分的に生地が露出。高台付近に釉が溜まり施釉に失敗。**69** は口幅2.5㎝、器高13.8㎝、胴部最大径6.3㎝、底径4.6㎝の１合銚子。胴部が膨らみ下方で最大径をもつ。口縁部は僅かに外反。底部を篦削りし碁笥底。高台内に㊞印を押す。胴部～底部に布羅志釉、頸部～口縁部に黒釉を施釉、また頸部に２箇所黄釉の垂れがある。畳付は施釉後掻き取り露胎。**70** は口幅2.9㎝、器高14.3㎝、胴部最大径7.3㎝、底径5.6㎝の１合半銚子。頸部は直線的に立ち上がり、口縁部は僅かに外反。底部を篦削りし碁笥底風。高台内に㊞印を押す。内器面は露胎。胴部～底部に黒釉、肩部～口縁部に高宮釉を施釉後、更に藁白釉を掛け３箇所に垂れがある。畳付は施釉後掻き取り露胎。**71** は口幅3.2㎝、器高14.8㎝、胴部最大径7.5㎝、底径4.8㎝の１合銚子。素焼きで廃棄。頸部は鶴首状に真直ぐ立ち上がり、口縁部は外反。外器面全体を皮革状の工具でナデ。底部を篦削りし碁笥底。高台内に㊞印を押す。**72** は口径3.2㎝、器高16.0㎝、胴部最大幅6.3㎝、底径4.46㎝の型物１合銚子。頸部～口縁部は断面円形で、直線的に立ち上がり口縁部が僅かに外反。胴部は断面八角形で上方に向かって細くなる。接合部の２面が幅広く、不整形な八面体。底部は平底露胎で、㊞印を押す。内器面に縦方向の非常に粗いナデ、極めて薄く布羅志釉を施釉。肩部～胴部に高宮釉、口縁部～頸部には藁白釉を施釉後、更に黒釉を掛ける。

徳　利（73～75、78、79、82）

73 は残存高13.9㎝、胴部最大径12.2㎝、底径7.0㎝の４合徳利。頸部及び胴部下方に竹節状の凸帯が巡り、その間を刷毛目調整。また胴部最大径付近４箇所を押圧。内２箇所は片手で持てるよう「八」字状を呈す。１箇所に極めて退化した恵比寿天又は大黒天を貼り付ける。底部に篦削り、平底露胎でハマの痕跡がある。器面に極めて薄く施釉、色調飴色。胎土やや粗く白色砂粒を多く含む。**74** は残存高13.9㎝、胴部最大径12.2㎝、底径8.3㎝に復元。頸部及び胴部下方に竹節状の凸帯が巡り、その間を刷毛目調整。胴部最大径付近を押圧し、１箇所に極めて退化した布袋を貼り付ける。底部には篦削りを施し平底露胎。器面に極めて薄く飴釉を施釉。胎土は粗く石英小粒を多く含む。**75** は残存高16.0㎝、胴部最大径12.2㎝、

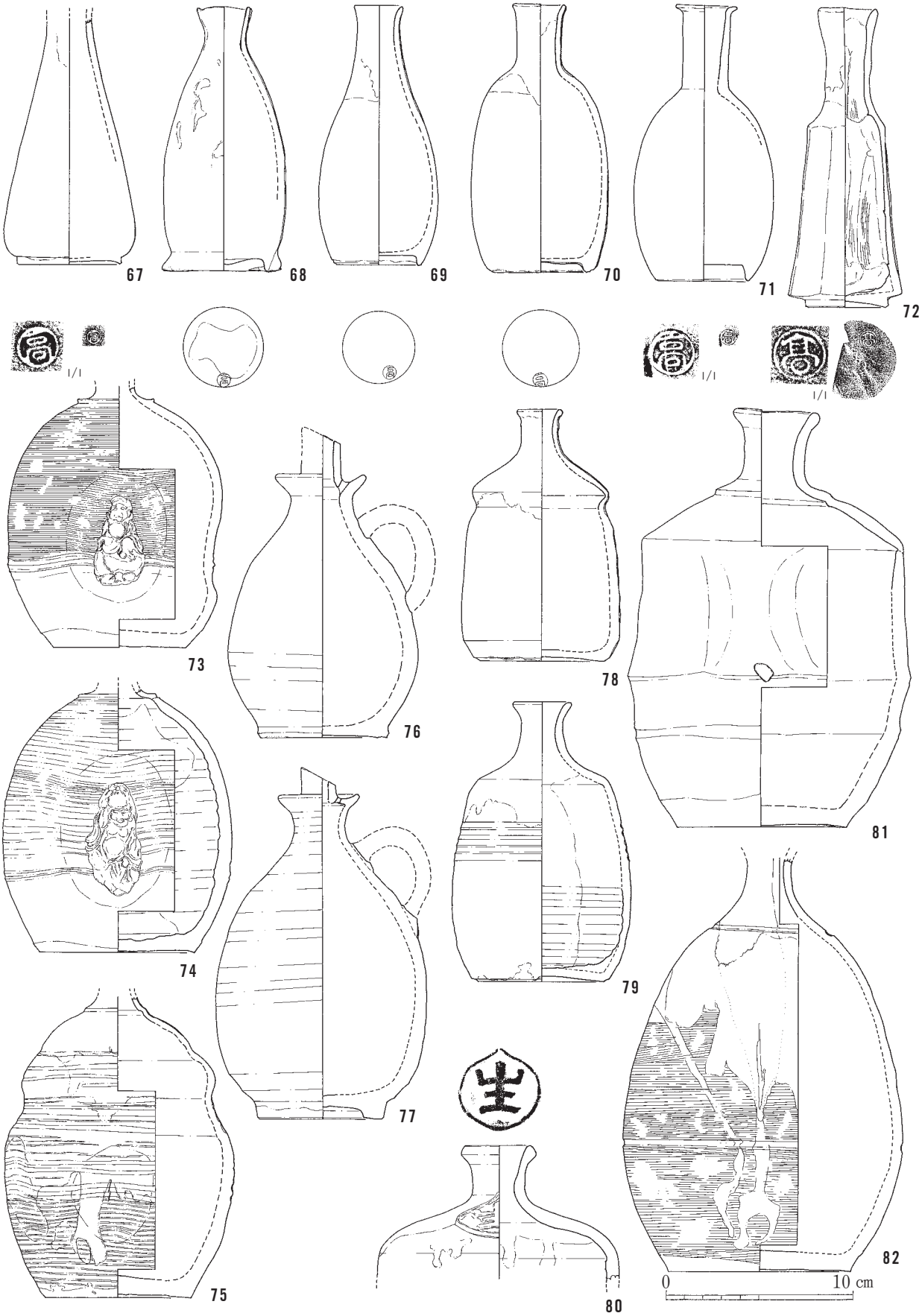


図 20　銚子・徳利・瓶等実測図（縮尺 1/3）

底径 7.9 ㎝の 5 合徳利。体部は瓢形に近い形状を呈し、肩部～胴部最大径付近に浅く粗い凹線文、肩部以下には粗い刷毛目。胴部下半は手で持てるよう 5 箇所を押圧。底部に篦削り、平底で露胎。外器面に高宮釉を施釉、肩部以上に藁白釉を施釉。**78** は口径 2.4 ㎝、器高 13.4 ㎝、胴部最大径 8.3 ㎝、底径 6.6 ㎝の 2 合徳利。肩部直下を凹ませ、口縁部は僅かに外反。底部に篦削り、平底で露胎。外器面に高宮釉を施釉、頸部～肩部に藁白釉を施釉。色調はにぶい緑みの黄～青みの白。**79** は口径 3.2 ㎝、器高 14.9 ㎝、胴部最大径 9.4 ㎝、底径 6.6 ㎝に復元される 3 合徳利か。体部上方に 5 条の凹線、以下には篦削り。口縁部はやや外反。底部平底で露胎。体部に銅化釉を施釉、口縁部～肩部に藁白釉。内器面は基本的に露胎だが部分的に銅化釉が掛かる。色調は暗黄橙色～銀鼠。**82** は残存高 22.0 ㎝、胴部最大径 14.9 ㎝、底径 9.9 ㎝の 1 升徳利。胴部に刷毛目を施した後、頸部と胴部の境界及び胴部最大径付近に凹線文。頸部は細く、底部平底で露胎。篦切り後ナデ。頸部～胴上端部に飴釉、胴部に高宮釉を施した後、肩部～胴部上半にかけ黄釉を厚く施釉。飴釉は部分的に胴部下方にまで垂れる。内器面にも高宮釉。色調は飴色～梔子色～鶯茶。胎土には白色粗砂を含む。

油 徳 利（76、77）

76 は口径 2.1 ㎝、残存高 16.1 ㎝、胴部最大径 10.0 ㎝、底径 6.8 ㎝で、容量は 2 合強。注口はやや長く斜め 30°に切断され、受部の把手側に空気孔を穿つ。把手は欠損。底部は篦削り、平底で露胎。外器面に飴釉を薄く掛け、色調はココナッツブラウン。**77** は口径 1.9 ㎝、器高 18.6 ㎝、胴部最大径 11.2 ㎝、底径 6.6 ㎝で、容量は 3 合半。注口は短く斜め 30°に切断され、受部の把手側に空気孔を穿つ。把手は欠損。底部は篦で高台を削り出す。外器面に飴釉を薄く掛け、色調は赤みの暗灰色。畳付付近のみ露胎。

瓶（80、81）

80 は口径 3.9 ㎝の保命酒瓶。口縁部は外反し、端部は肥厚。肩部明瞭で、胴部は直線的と推定される。肩部正面に、宝珠で囲んだ“生”字を記した型物の商標を貼り付ける。肩部以下胴部に銅化釉、口縁部～肩部に藁白釉を施釉。内器面は露胎。**81** は口径 4.4 ㎝、器高 22.3 ㎝、胴部最大径 15.0 ㎝、底径 9.0 ㎝の 1 升瓶(竹の節瓶)。口縁部はやや外反し肥厚。胴部の竹節の表現は極めて退化し、枝も粘土粒を貼り付けるのみ。底部に篦削り、露胎で輪状のハマ痕跡がある。内・外器面ともに飴釉又は銅化釉と考えられる釉を薄く掛け、濃い飴色～消炭色に発色。胎土は白色砂粒を含む。

燈　　盞（83～87、92）

83 は口径 7.8 ㎝、器高 1.8 ㎝、底径 4.4 ㎝。体部～底部に篦削り。内器面体部～見込みに高宮釉施釉、色調はベージュ。口縁部～外器面は露胎。B-01 グリッド整地層出土。**84** は口径 5.2 ㎝、坏部径 8.2 ㎝、器高 2.05 ㎝、底径 4.5 ㎝。坏体部～底部を篦削りし平底。口縁部以外の内器面に高宮釉施釉、色調はベージュ。他は露胎。B-02 グリッド整地層出土。**85** は口径 5.8 ㎝、坏部径 8.8 ㎝、器高 3.4 ㎝、底径 3.7 ㎝。坏体部～底部を篦削りし碁笥底。口縁部以外の内器面に高宮釉施釉、発色不良で色調は黄土色～ココナッツブラウン。他は露胎。B-01 グリッド整地層出土。**86** は口径 7.2 ㎝、坏部径 11.2 ㎝、器高 3.7 ㎝、底径 6.2 ㎝。底部付近を篦削りし平底。口縁部以外の内器面に高宮釉施釉、色調はベージュ。他は露胎。B-04 グリッド整地層出土。**87** は口径 5.9 ㎝、坏部径 11.1 ㎝、器高 4.5 ㎝、底径 4.0 ㎝。底部付近を篦削りし碁笥底。口縁部以外の内器面に高宮釉施釉、色調はカーキ色。他は露胎。**92** は口径 10.7 ㎝、器高 1.9 ㎝、底径 4.8 ㎝。体部～底部に篦削り。見込みに高宮釉施釉、色調はベージュ。嵌入及びピンホールがある。他は露胎。口縁部に粘土を貼った耳が 1 箇所付く。

乗　　燭（88、89）

88 は燈盞部口径 4.3 ㎝、燈盞部径 6.3 ㎝、器高 5.6 ㎝、受皿部径 7.3 ㎝、底径 5.0 ㎝。燈盞と受皿を粘土柱で接合する。燈盞口縁部は内傾して折れ曲がり、更に端部が上方に突出。1 箇所を篦切りし、片口を貼る。全面に高宮釉を施釉し、底部は掻き取り露胎。色調はベージュ。B-01 グリッド整

地層出土。**89** は燈盞部口径 4.2～4.5 ㎝、燈盞部最大径 6.5 ㎝、器高 5.6 ㎝、底径 4.4 ㎝。扁平な球状の燈盞に脚を接合する。燈盞部の見込みには、粘土小板を巻いた燈芯立てを貼り付ける。脚部には径 0.5 ㎝、深さ 2.0 ㎝の芯立てが円錐状に穿たれる。燈盞部には高宮釉を施釉、色調ベージュ、脚部下半は露胎で底部糸切。

油　　差（90、91）

90 は幅 3.6 ㎝、高 7.4 ㎝を測る油差の把手片。舌状を呈し、上部に円孔が穿たれる。全面に高宮釉を施釉し、色調はベージュ。**91** は口径 4.5 ㎝、胴部最大径 7.8 ㎝、壷部高 3.2 ㎝、底径 4.9 ㎝。口縁部は内傾し、口縁部は短く立ち上がる。体部１箇所を篦切りし二重の注口部を貼る。注口の反対側胴部最大径付近に把手を貼り付けるが、欠損する。底部は糸切。口縁端部と底部のみ露胎、他は高宮釉を施釉し、色調はベージュ。

合　　子（93）

93 は復元幅 6.0 ㎝、器高 1.45 ㎝。久留子形を呈し、型物で製作された身の内側に粘土を貼り受部を作る。素焼品で香合と考えられる。

置　　物（94）

94 は残存長 8.0 ㎝、器高 2.65 ㎝、幅 5.8 ㎝の亀形置物。首と尾が欠損。型で甲羅・尾・手を作った後、首を付け内側に粘土を充填する。底部には縦方向のナデを施し露胎。表面には銅化釉を施釉し、色調は金茶～鶯茶。熨斗押さえか。

水　　滴（95～101）

95 は口径 1.0 ㎝、胴部高 4.8 ㎝、胴部最大径 4.9 ㎝、底径 3.5 ㎝。胴部は尻膨形、外器面下半に篦削り。口縁部は短く外反気味。注口は直線的で反対側に環状の把手が付くが欠損。底部は露胎で、全面に黄釉を施釉し黄土色に発色。肩部の一部は白緑色に発色し、緑青釉を施釉していると推定される。**96** は口径 2.4 ㎝、最大径 6.1 ㎝を測る胴部の上半片。胎土は精良で金雲母を含み、焼成は軟質。半裁された算盤玉形を呈し、型物で外器面に椰子の葉状の文様を星形に配す。端部１箇所に粘土小板を巻いたやや曲線的な注口が貼り付けられ、その軸上の体部２箇所に釣手状の把手痕跡がある。口唇部～内器面は露胎。外器面には緑釉を施釉し、強い黄緑色に発色する。**97** は胴部最大径 7.5 ㎝、底径 6.0 ㎝。体部上半に直線的な注口が付く。全面に高宮釉を施釉し、色調はベージュ。底部は篦削りで掻き取り露胎。**98** は胴部最大径 10.2 ㎝、底径 9.5 ㎝。体部上半に注口が付くが欠損。体部上半には菊もしくは蓮を線刻で施文。全面に飴釉を薄く施釉、底部は篦削りで釉を掻き取り露胎。**99** は胴部最大径 9.9 ㎝、底径 8.3 ㎝。体部上半に注口が付くが欠損。体部に刷毛目調整。全面に飴釉を施釉、色調は赤みの暗灰色。底部は上げ底気味で、篦削りで釉を掻き取り露胎、砂目が残る。**100** は胴部最大径 8.5 ㎝、胴部高 7.35 ㎝、底径 5.4 ㎝で２段の宝珠形を呈する素焼品。上段下端付近に注口痕があり、天井部付近に空気孔が穿たれる。また注口の反対側に環状の把手痕があるが、注口との軸線上からやや外れる。底部付近は篦削り、他はナデ調整。**101** は胴部最大径 9.2 ㎝、胴部高 7.9 ㎝、底径 5.4 ㎝で５段の宝珠形を呈する素焼品。２段目に注口痕があり、４段目に空気孔が穿たれる。また、注口の反対側に環状の把手痕があるが注口との軸線上からやや外れる。底部付近は篦削り、他はナデ調整。

陶　　硯（102、103）

102 は幅 9.3 ㎝、器高 3.2 ㎝の素焼品。海陸の粘土板に四側を貼り付け成形。端部は面取り。海陸は篦削りの後ナデ調整。背面は断面蒲鉾形に削られる。**103** は幅 15.1 ㎝、器高 4.4 ㎝の素焼品。形状は楕円形を呈し、端部は細い竹もしくは割り箸状の工具で施文した後、楊枝状の工具で細かく刺突し、珍山奇山を表現している。両面に海陸が設けられ、片面海は不整方向のやや丁寧な篦削り、他面には粗い横方向の篦削りを施す。両面ともに莫蓙状の圧痕がみられる。

瓶　　子（104）

104 は口径 1.8 ㎝、器高 7.2 ㎝、胴部最大径 4.6 ㎝、底径 3.4 ㎝。胴部に篦削りを施し、口縁部は短く外反気味で僅かに肥厚。底部は平底で露胎。外器面に緑青釉を施釉し、薄い青緑色。

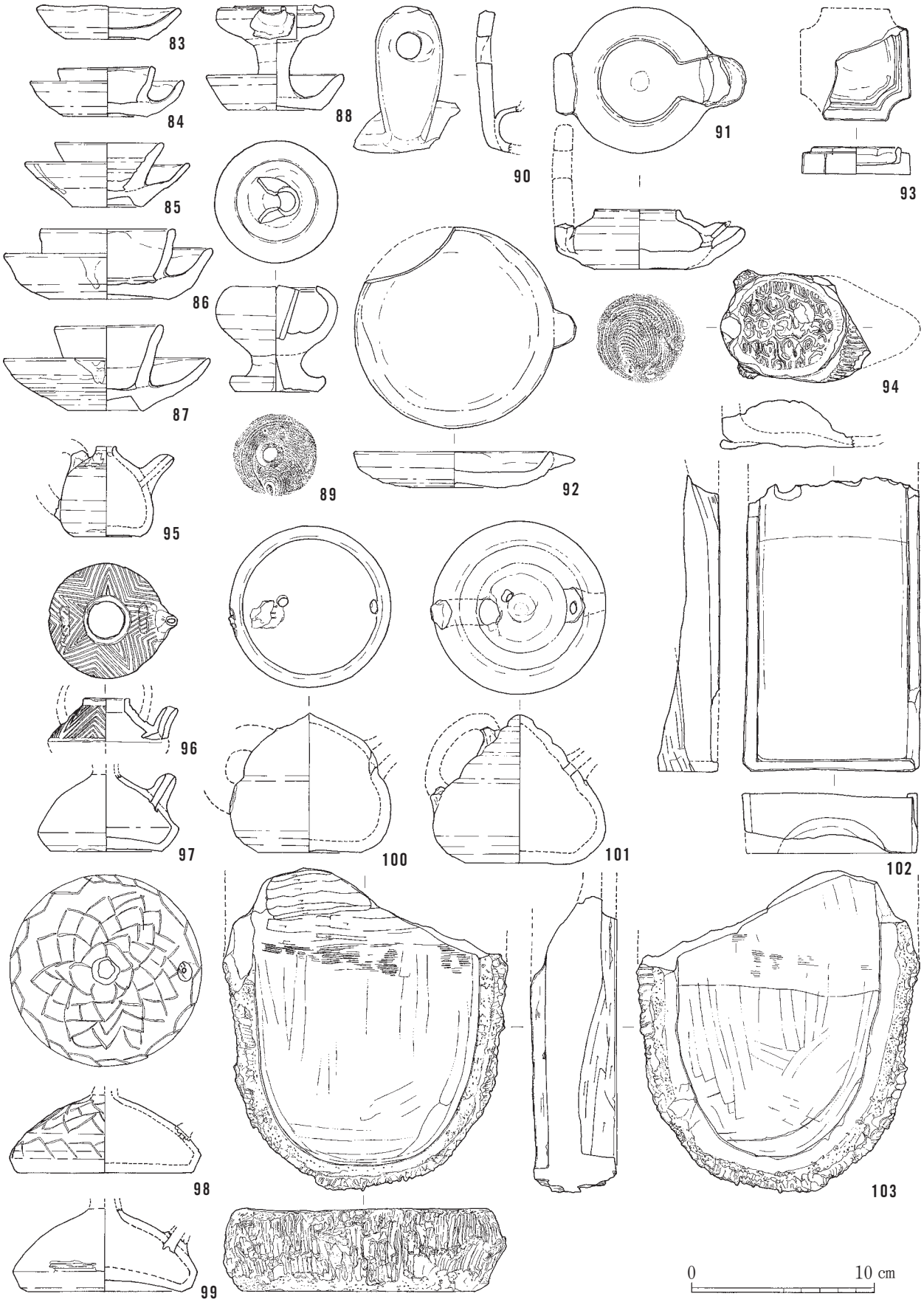


図 21　燈明器・文房具等実測図（縮尺 1/3）

高　　坏（105）

105 は口径 6.9 ㎝、器高 3.8 ㎝、頸部径 3.1 ㎝、底径 5.3 ㎝の素焼品。口縁端部は上方に短く立ち上がる。脚底部に箆削り、外器面にナデ。

香　　炉（106、107）

106 は口径 5.8 ㎝、器高 4.7 ㎝、底径 6.0 ㎝。体部はやや内傾気味。胴部下半以下に箆削りを施し、底部は円座状。裾部に粘土粒を指で押さえた非常に簡易な三脚を貼り付ける。内器面と底部は露胎。外器面には高宮釉を施釉した後、口縁部に藁白釉を施釉。色調はベージュ～黄みの明灰色。**107** は口径 11.6 ㎝、器高 5.1 ㎝、胴部最大径 11.2 ㎝、底径 5.8 ㎝。胴部下半以下に箆削りを施し、底部は円座状。体部と底部の境界に粘土粒を指で押さえた非常に簡易な三脚を貼り付ける。内器面と底部は露胎。外器面には銅化釉を施釉した後、口縁部に藁白釉を施釉。色調は金茶。

花　　入（108～124）

108、**109** は螺子抜き形掛花入の素焼品。**108** の背面は平らで楕円形の釘穴の穿孔がある。**110** は胴部最大径 9.6 ㎝の瓢形花入。内器面及び外器面下半に銅化釉、外器面上半に黒釉を施釉。**111** は口径 6.5 ㎝、器高 13.3 ㎝、胴部最大径 10.7 ㎝、底径 5.4 ㎝の瓢形花入。轆轤成形後、外器面には箆削り、口縁部にはナデを施し、背面を板状の工具で平坦にする。背面上端部に釘穴を穿孔。素焼品。**112** は口径 8.4 ㎝、器高 15.1 ㎝、底径 9.6 ㎝。口縁部は外方に広く開き、端部が短く立ち上がる。肩部に 3 条、胴部中央に 1 条の凹線文。底部平底で露胎。内・外器面に高宮釉を施釉後、口縁部～肩部に緑青釉を施釉。色調はベージュ～薄い青緑色。**113** は口径 8.9 ㎝、器高 18.3 ㎝、底径 7.8 ㎝。胴部は真直ぐ立ち上がり、口縁端部が短く内側に突出。裾部にのみ箆削りを施し、底部は露胎。内・外器面に布羅志釉、胴部下半に藁白釉を施釉。色調はカーキ～緑みの白。**114** は口径 9.2 ㎝、残存高 16.4 ㎝で不明瞭な瓢形。口縁部～外器面に飴釉、胴部上半には藁白釉を、特に正面には二重に垂らす。色調は赤みの暗灰色～ベージュ。また外器面の轆轤目部分は飴釉が掠れ景色となる。**115** は復元口径 9.2 ㎝、器高 16.9 ㎝、胴部最大径 10.6 ㎝、底径 10.2 ㎝。口縁部は喇叭状に開き、端部は上方に立ち上がる。頸部に粘土紐を蕨手状に捻った双耳を付ける。胴部はほぼ球形を呈し、頸部との境界に凹線が 2 条巡る。胴部下半は裾を拡げ、円盤状の底部と貼り付ける。底部糸切りで、ハマの痕跡がある。底部以外の全面に高宮釉を、特に口縁部～頸部にかけて厚く施釉。色調はメロンイエロー。容量 500 cc。**116** は口径 7.1 ㎝、器高 12.0 ㎝、胴部最大径 7.4 ㎝、底径 5.6 ㎝。口縁部は朝顔状に開き、端部が僅かに肥厚。頸部のほぼ中央に粒状の双耳を付ける。胴部はほぼ球形を呈し、底部は円座状に箆削りし、糸切り。内器面頸部～外器面に飴釉を施釉後、口縁部に藁白釉。内器面下方は露胎。色調は飴色～生成色。B-01 グリッド整地層出土。**117** は口径 3.8 ㎝、器高 6.4 ㎝、胴部最大径 3.8 ㎝、底径 3.8 ㎝。口縁部は朝顔状に外反し、胴部はほぼ球形だが非常に小さく、下半は裾を拡げ円盤状の底部を貼り付ける。底部糸切りで露胎。口縁部～外器面に高宮釉を施釉後、口縁部に藁白釉。色調はベージュ。**118** は口径 5.2 ㎝、器高 7.6 ㎝、胴部最大径 4.8 ㎝、底径 4.2 ㎝。口縁部は朝顔状に外反し、端部がやや立ち上がる。胴部はほぼ球形を呈し、下半～底部は箆で削り出される。底部は糸切りで露胎。口縁部～外器面に高宮釉を施釉後、口縁部に藁白釉。発色は不透明。**119** は口径 5.6 ㎝、器高 9.6 ㎝、胴部最大径 5.8 ㎝、底径 4.3 ㎝。口縁部は朝顔状に外反。頸部がやや長く、胴部はやや扁平な球形。胴部以下は箆削りが施され、底部は円座状で上げ底気味。底部以外に高宮釉を施釉、色調は鈍い緑みの黄。**120** は口径 7.5 ㎝、器高 9.9 ㎝、胴部最大径 6.6 ㎝、底径 5.2 ㎝。口縁部は朝顔状に大きく外反し、端部が上方に立ち上がる。胴部はほぼ球形を呈し、胴裾部に箆削りを施し拡がる。口縁部～外器面に飴釉を施釉後、口縁部には藁白釉。釉の風化が進む。底部は露胎でナデ調整を施す。**121** は復元口径 9.4 ㎝、器高 15.6 ㎝、胴部最大径 9.3 ㎝、底径 7.8 ㎝。口縁部は喇叭状に開き、端部に段が付き上方に立ち上がる。頸部には粘土紐を蕨手状に捻った双耳

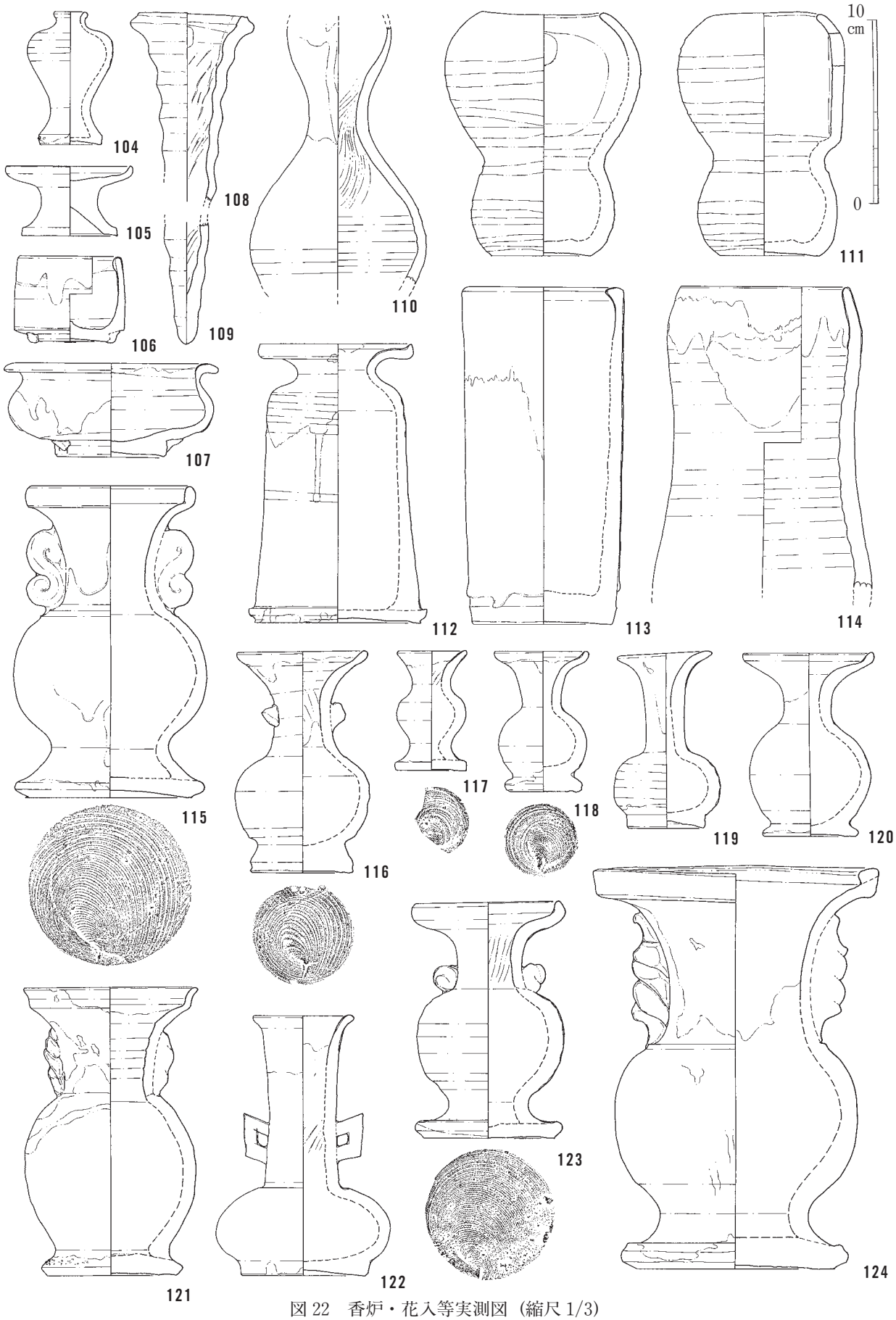


図 22　香炉・花入等実測図（縮尺 1/3）

が付く。胴部は瓜実状にやや長い球形を呈し、円盤状の底部を貼り付ける。底部は露胎でハマの痕跡が、また裾部には砂痕が確認できる。口縁部～外器面に飴釉を施した後、頸部の片方の耳側から藁白釉を掛ける。色調は赤みの暗灰色～生成色。容量 400 cc。**122** は口径 5.3 ㎝、器高 14.1 ㎝、胴部最大径 9.5 ㎝、底径 7.0 ㎝。頸部が長く、下方に「コ」字状の双耳を付ける。口縁部は僅かに外反気味。頸部と胴部の境界は押圧される。胴部は扁平な球形を呈し、底部は円座状に削り出される。底部以外の外器面に高宮釉を施釉後、口縁部に黒釉。色調はベージュ～黒茶。B-06 グリッド整地層直上出土。**123** は復元口径 8.3 ㎝、器高 12.8 ㎝、胴部最大径 8.0 ㎝、底径 8.0 ㎝。口縁部は喇叭状に開き、端部は内湾気味に立ち上がる。胴部との境界には粘土紐をコイル状に巻いた双耳を付ける。胴部はほぼ球形を呈し、外器面に篦削りを施す。下半は裾を拡げ、円盤状の底部を貼り付ける。裾部に砂が付着。底部糸切りで露胎。内・外器面に高宮釉を施釉、色調はベージュ。**124** は復元口径 15.6 ㎝、器高 21.8 ㎝、胴部最大径 13.2 ㎝、底径 12.3 ㎝。口縁部は朝顔状に開き、端部に粘土紐を貼り合わせ肥厚させる。頸部には粘土紐を撚った双耳を付ける。胴部はほぼ球形を呈し、頸部との境界には凸線が 1 条巡る。胴部下半は裾を拡げ、円盤状の底部と貼り付ける。底部は篦削りを施し、ハマの痕跡が確認できる。内器面頸部～外器面にかけて飴釉を施釉後、口縁部～頸部にかけて藁白釉を、特に前面と背面を意識した垂れ状に施釉する。色調は飴色～黄みの明灰色。容量 1 ℓ の大型品である。

漁　　錘（125）

125 は器高 5.5 ㎝、孔径 2.4 ㎝、最大径 5.2 ㎝。外器面の両裾部に篦削りを施す。端部は露胎で、内・外器面に薄い飴釉を施釉。色調は飴色～金茶。

壺（126）

126 は口径 11.8 ㎝、胴部最大径 21.4 ㎝に復元される。口縁部は短く、内傾気味に立ち上がり、全体に篦削りが施され、特に胴部との境界は器壁が薄い。肩部は外方に張り、下半に向かって細くなる。口縁端部のみ露胎で、内・外器面に高宮釉を施釉。外器面は下から上に向かって釉掛けしている。肩部には更に藁白釉と黒釉をそれぞれ 4 箇所に掛け分けていると推定される。色調はベージュ、青みの白、緑みの暗灰色を呈す。

火　　入（128～130）

128 は口径 10.6 ㎝、器高 7.6 ㎝、底径 10.5 ㎝。胴部はほぼ真っ直ぐ立ち上がり、口縁部は内側に折り込まれる。胴部下半に篦削りを施し、高台を作り、3 箇所を蒲鉾形に切る。内器面と底部は露胎。外器全面に白色の釉薬を施釉し、部分的に緑青釉を掛ける。**129** は口径 7.0 ㎝、器高 9.0 ㎝、胴部最大径 10.6 ㎝、底径 7.5 ㎝に復元され、瓢形を呈する。口縁部は内傾し、端部下端に粘土紐が貼り付けされ肥厚する。底部は碁笥底に削り出され、蒲鉾形に切り込みが入る。口縁部～胴部下半にかけて飴釉の後、胴部上半に黄釉を掛ける。内器面と底部は露胎。色調はココナッツブラウン～黄土色。**130** は口径 9.0 ㎝、器高 9.8 ㎝、胴部最大径 11.8 ㎝、底径 8.6 ㎝に復元される。瓜形を呈し、胴部の上端から下端にかけて鉋状の工具で縦に 6 本の凹線が入る。各区画の肩部には、釦状の粘土粒が貼り付けられる。口縁部は内傾し、内側に突出し稜線は明確である。底部は碁笥底に削り出され、蒲鉾形に切り込みが入る。口縁部～胴部下半にかけて高宮釉を施釉、色調はオリーブグリーン。内器面及び底部は露胎。

植 木 鉢（132、133）

132 は口径 15.2 ㎝、器高 11.3 ㎝、底径 10.6 ㎝。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は僅かに外反し、端部に粘土紐を貼り付ける。下端部は棒状の工具で波状に施文される。体部上方に 1 条の幅広い凸帯が巡り、口縁部間との区画に 6 個に復元される釦状の粘土粒が貼り付けられる。胴部下半～底部にかけては篦削りが施され、高台が削り出される。高台内は平底で、中央付近は更に深く削り出されるが、孔が開かない。高台 3 箇所に蒲鉾形に切り込みが入る。口縁部～胴部下半にかけて薄い飴釉を施釉。内器面と底部は露胎。裾部に砂が付着。133 は口径 19.0 ㎝、器高 16.5 ㎝、底径 8.8

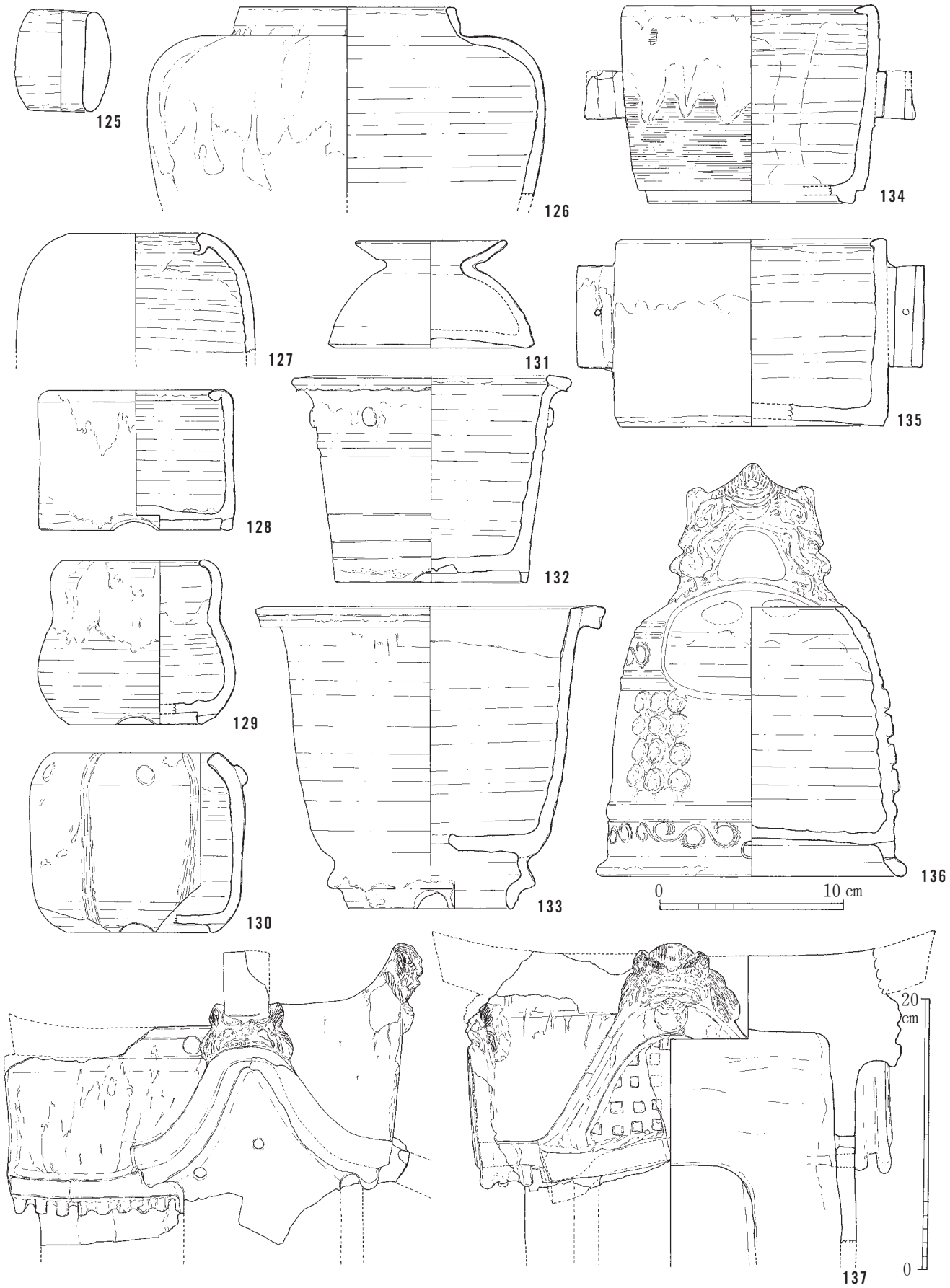


図 23　火入・植木鉢・手焙・稲荷社等実測図（縮尺 1/3、1/4）

cm。体部は外反気味に立ち上がり、口縁部は粘土紐を貼り付け肥厚させる。口唇部には１条の凹線が巡る。高台は断面「く」字状を呈し、別に轆轤成形したものが貼り付けられている。外器面には篦削りを施し、高台はナデ調整。底部の中央には孔が開けられる。高台３箇所に蒲鉾形に切り込みが入る。口縁部～高台上半にかけてやや厚い飴釉の後、口縁部に藁白釉と考えられる白色系統の釉薬を施釉。内器面と底部は露胎。

手　　焙（136）

136 は複数個の破片から復元した。底径 16.8 cmを測り、器高は 22.5 cm程度に復元される梵鐘形手焙。笠形はやや隆起し、突端部は小さく穿孔された後、粘土を上部から詰めて塞ぎ直している。竜頭は大きく口を開いて笠形を喰み、上顎の髭で笠形と接触している。各々１個短い角を持ち、その間に鬣が立ち上がる。鬣の両側面には宝珠のレリーフがある。上帯は各２条の凹線で区画され、その間に唐草文が施文される。鐘身の下方には突帯を１条巡らし、底部には外反する高台を貼り付け、その間を下帯として上帯と同様に唐草文を施文する。唐草文は、四葉一組をスタンプで施文する。高台１箇所には直径１cm程度の円孔が穿たれる。上下帯間を乳の間とし、粘土粒を貼り付けた縦４個×横３個を一区画とする乳を４箇所に配する。笠形の片方には、径２cm前後の穿孔が２箇所みられるが、欠損しており数は不明である。反対側は、乳の間の上端部にかけて大きく口が開けられる。外器面には飴釉を施釉するが、高宮釉を掛けた別個体で同様の手焙片も数個出土している。底部高台内と内器面は露胎であるが、天井部には施釉される。細工物の優品と考えられる。

このほか桜の花弁文を穿孔した手焙片や小型のものなどが出土しており、様々な形状のものが製作されたと推測される。

稲 荷 社（137）

137 は正面の残存幅 31.9 cm、奥行き残存長 30.5 cmを測る。下部は欠損。拝殿の形状は切妻造だが、奥部に直行方向の幣殿状を呈する切妻造の神座を張り出した特異な様式である。拝殿及び神座は反り屋根で勾配がきつく、破風板の表現がある。拝殿正面には千鳥破風が付き、破風板の合わせ目には宝珠が付く。破風の内側にはスタンプで木連格子を表現するが、配列が整然としない。拝殿大棟は、断面長方形の棒状を呈し、その両端と千鳥破風の正面に唐獅子の鬼瓦を載せる。向拝部は欠損するが、屋根の起り方から唐破風が付いていた可能性がある。拝殿両側の壁には２箇所ずつ同じ位置に穿孔がある。神座の屋根の高さは拝殿よりも低く、拝殿大棟の下端部に神座大棟があたる。神座大棟の両側面には、石餅状の飾り金具が表現されるが数量は不明。端部には鬼瓦の痕跡がなく、元来付けられていなかったと考えられる。神座の垂木は各８本。内・外器面の全面に飴釉を施釉後、屋根を中心に緑青釉を施釉。色調は飴色～白緑。胎土は粗く、粗砂を多く含む。

不明容器（127、131、134、135）

127 は口径 6.8 cm、胴部最大径 13.0 cmに復元。口縁部は、矢筈口状の蓋受け部を作り出し露胎。肩部以下は緩やかに下がる。内器面には薄い飴釉、外器面には緑青釉を施釉。外器面の色調は緑みの明灰色～薄い青緑色。嵌入及び成分が風化したと考えられる白色斑点がみられる。香炉の可能性も考えられる。**131** は口径 8.3 cm、器高 5.8 cm、底径 11.1 cm。胴部は半球形を呈し、口縁部は広口に大きく外反。底部は平底。器面全体に黒釉を施釉後、底部は篦削りで露胎。色調は黄みの暗灰色。唾壺の可能性も考えられるが小振りである。**134** は口径 14.0 cm、器高 10.8 cm、底径 11.2 cmに復元。胴部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部は内側に折れ、断面の形状は嘴形を呈す。胴部全体に刷毛目を施し、ほぼ中央に断面八角形の管耳が付く。裾部～底部には篦削りを施し、高台を削り出す。内器面と底部は露胎。外器全面に飴釉、上半は更に黄釉・藁白釉の順で施釉。色調は赤みの暗灰色、黄土色、青みの白。形状は水指状だが、容量が１ℓ程度であり、水指としては機能しないと考えられる。A-06 グリッド整地層出土。**135** は口径 14.8 cm、器高 10.2 cm、底径 14.4 cmに復元。胴部は直線的に立ち上がり、口縁部は内側に短く折れる。

胴部のやや上方に断面円形の管耳が付く。耳のほぼ中央は穿孔される。裾部以下篦削りされ、底部は平底。内器面と底部は露胎。外器面に飴釉の後、口縁部には藁白釉を施釉。色調は赤みの暗灰色、生成色～緑みの白。形状は水指状であるが、容量が１ℓ強であり、水指としては機能しないと考えられる。A-01グリッド整地層出土。

擂　　鉢（138～144）

138は復元口径36.8㎝、器高15.7㎝、底径13.4㎝。口縁部は粘土紐を貼り付け肥厚させる。口縁部下端には、僅かに隆起した凸線が巡る。高台は丸みを帯び、端部に砂目が残る。擂目は粗く、見込みの中心から体部に直線的に立ち上げ、口縁部はナデ消される。焼き締めで色調は赤みがかった暗茶褐色。胎土粗く、石英粒、黒色砂粒を多く含む。見込みの端部付近にハマ痕がある。**139**は復元口径38.0㎝、器高16.5～17.7㎝、底径17.6㎝。口縁部は僅かに肥厚し、１箇所を開いて片口とする。口縁部下端には２条の凸線が巡る。底部には篦削りを施し、裾部が開く高台を削り出す。擂目は非常に粗く、見込みの中心から体部に直線的に立ち上げ、口縁部はナデ消される。施文具の単位は幅2.5㎝に11本を数える。焼き締めで、色調はやや赤みがかった暗茶褐色。胎土は非常に粗く、石英粒を多く含む。見込みに直径12.8㎝のハマが付着。A-01グリッド整地層出土。**140**は復元口径15.6㎝、器高6.0㎝、底径7.8㎝。口縁部は僅かに肥厚し、口縁部下端には凹線の名残を僅かに看守できる。高台は外反し、端部は丸みを帯び砂目が残る。擂目は非常に細かく、見込みの中心から体部に直線的に立ち上げ、口縁部はナデ消される。外器面に極めて薄く飴釉を施釉し、色調はココナッツブラウン。胎土は概ね精良。見込みの端部付近にハマ痕がある。**141**は口径17.6㎝、器高6.3㎝、底径7.6㎝。口縁部は肥厚せず丸みを帯びる。体部には篦削りを施し、底部は碁笥底。擂目はやや細かく、見込みの中心から体部に向かって８方向に直線的に立ち上げ、口縁部はナデ消される。施文具の単位は幅1.7㎝に12本を数える。全面に極めて薄く飴釉を施釉し、色調は飴色。胎土は概ね精良。内器面体部の中央付近にハマ痕がある。A-07グリッド整地層出土。**142**は復元口径19.6㎝、器高8.3㎝、底径8.6㎝。口縁部はやや肥厚し丸みを帯びる。１箇所を開いて片口とする。底部平底で、直径8.2㎝の円盤状のハマが付着。裾部にのみ篦削り。擂目は粗く、見込みの中心から体部に向かって直線的に立ち上げ、口縁部はナデ消される。施文具の単位は幅1.6㎝に７本を数える。焼き締めで、色調は赤みの灰茶色。胎土は非常に粗く石英粒や黒色粗砂を多く含む。内底にハマ代わりの粘土塊が３箇所付着。A-01グリッド整地層出土。143は復元口径26.0㎝、器高8.9㎝、底径10.0㎝。口縁部には粘土紐を貼り付け外側に突出し、体部との境界に浅い凹線が巡る。口縁部下端１箇所を半月状に穿孔し、薄い粘土板を貼り付け片口とする。底部は裾部を篦削りし平底。擂目は粗く、見込みの中心から体部に向かって直線的に立ち上げ、口縁部はナデ消す。焼き締めで色調はココナッツブラウン。胎土は粗く、石英粒や赤色細粒、黒色細粒を多く含む。内器面体部下方にハマ痕がある。144は口径25.6㎝、器高10.4㎝、底径11.6㎝。口縁部には粘土紐を貼り付け外側に突出。端部は丸みを帯びる。口縁部下端１箇所を舌状に穿孔し、薄い粘土板を貼り付け片口とする。体部下半を篦削りし平底。擂目は粗く、見込みの中心から体部に向かって直線的に立ち上げ、口縁部はナデ消される。素焼き品で胎土は粗く、白色細砂や粗砂を多く含む。埋納遺構SX-02の蓋である。

鍋（146）

146は口径21.7㎝、器高10.5㎝、底径8.8㎝を測る。底部は平底と考えられるが、歪みが生じ膨らむ。体部下半は緩やかに外反し、円錐形の脚が３個付く。上半はほぼ真直ぐ立ち上がり、口縁部との境界には明瞭な段が付く。口縁部は外方に伸びた後、上部へ僅かに立ち上がり蓋受けを作る。口縁両端部に粘土紐を貼り付けた把手が付く。見込みには同心円状の刷毛目調整、外底には篦削りを施す。外底以外に飴釉を非常に薄く施釉する。生地内の気泡膨張が多くみられる。

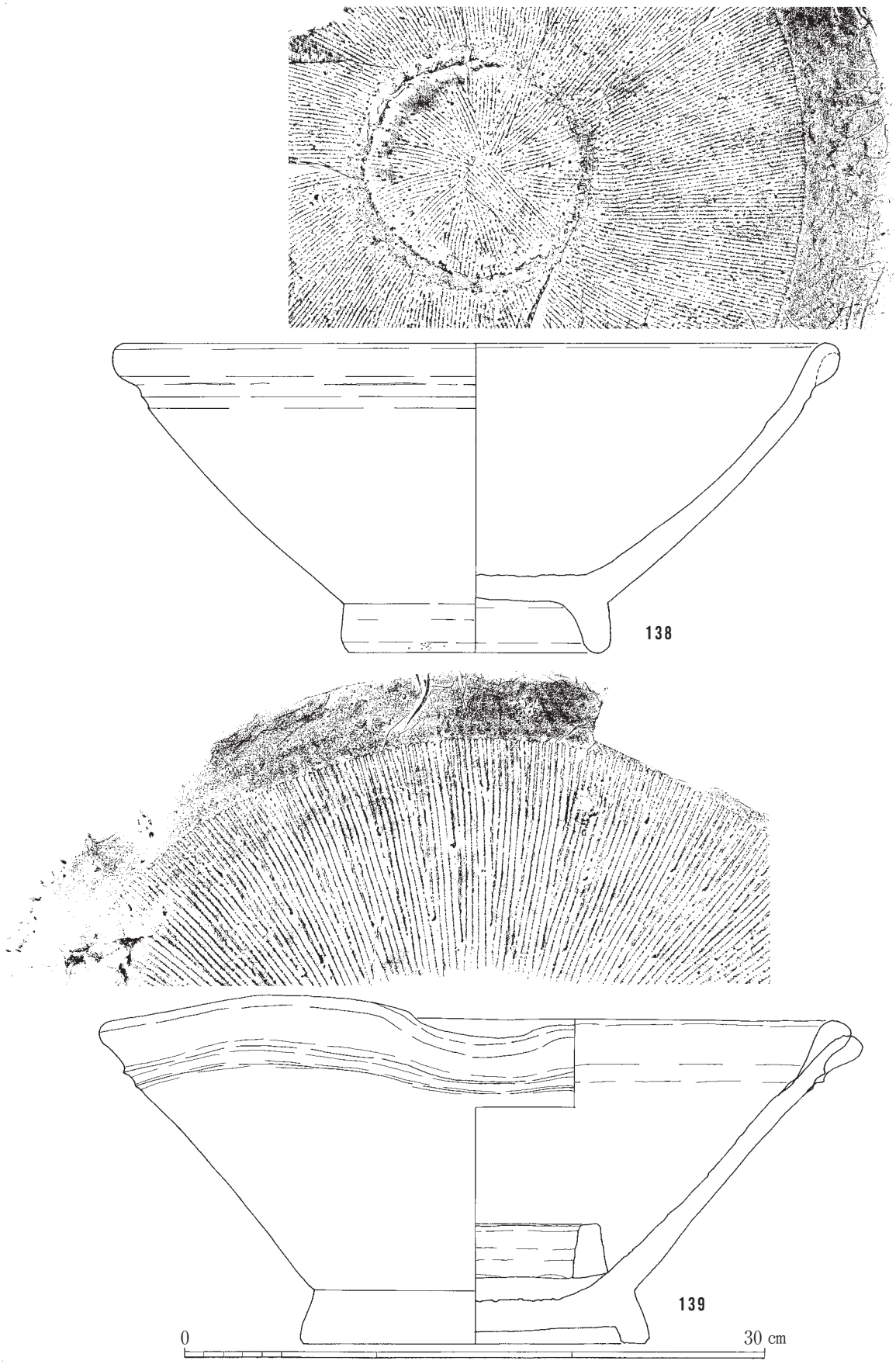


図 24　大型擂鉢実測図（縮尺 1/3）

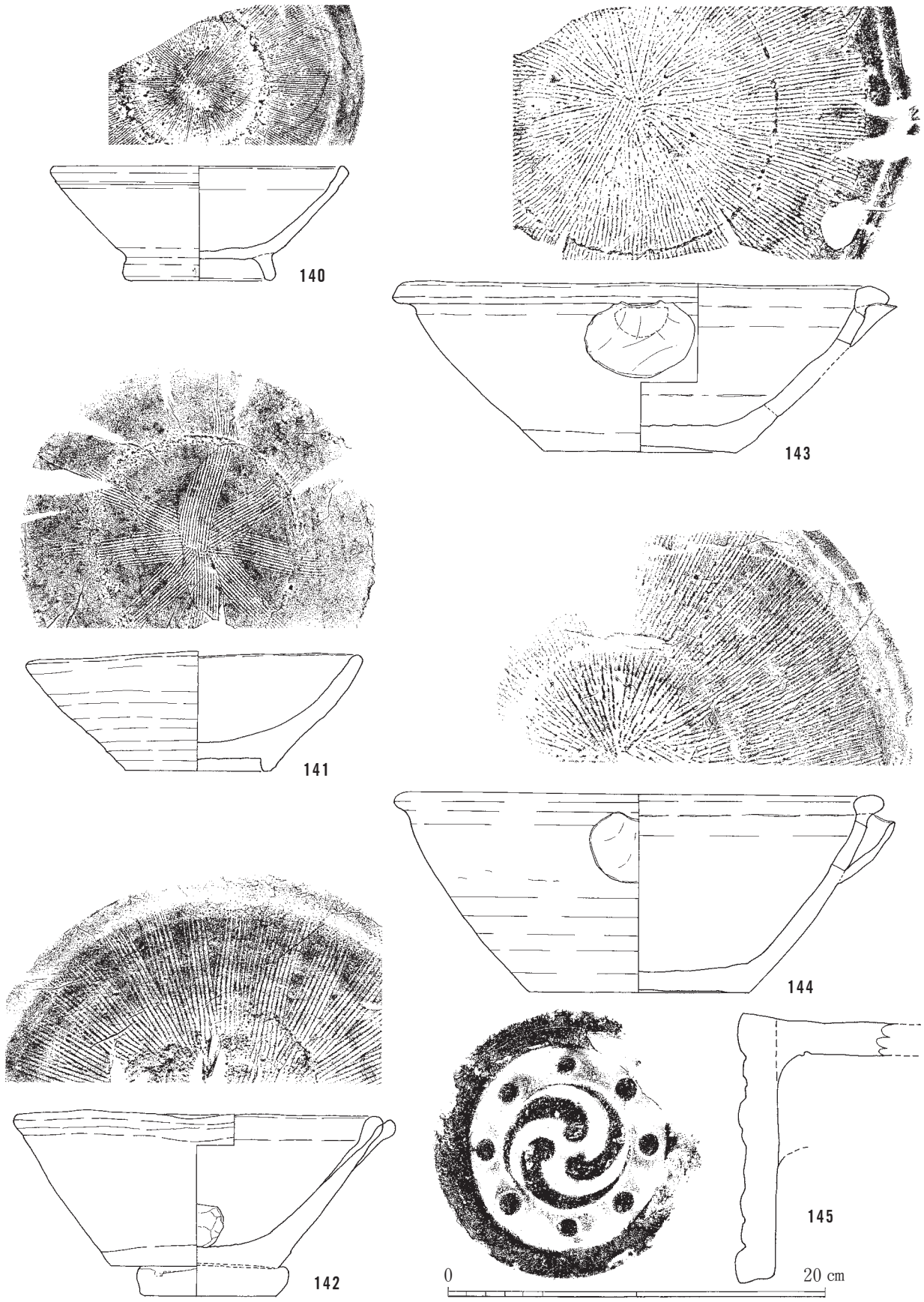


図 25　擂鉢、瓦実測図（縮尺 1/3）

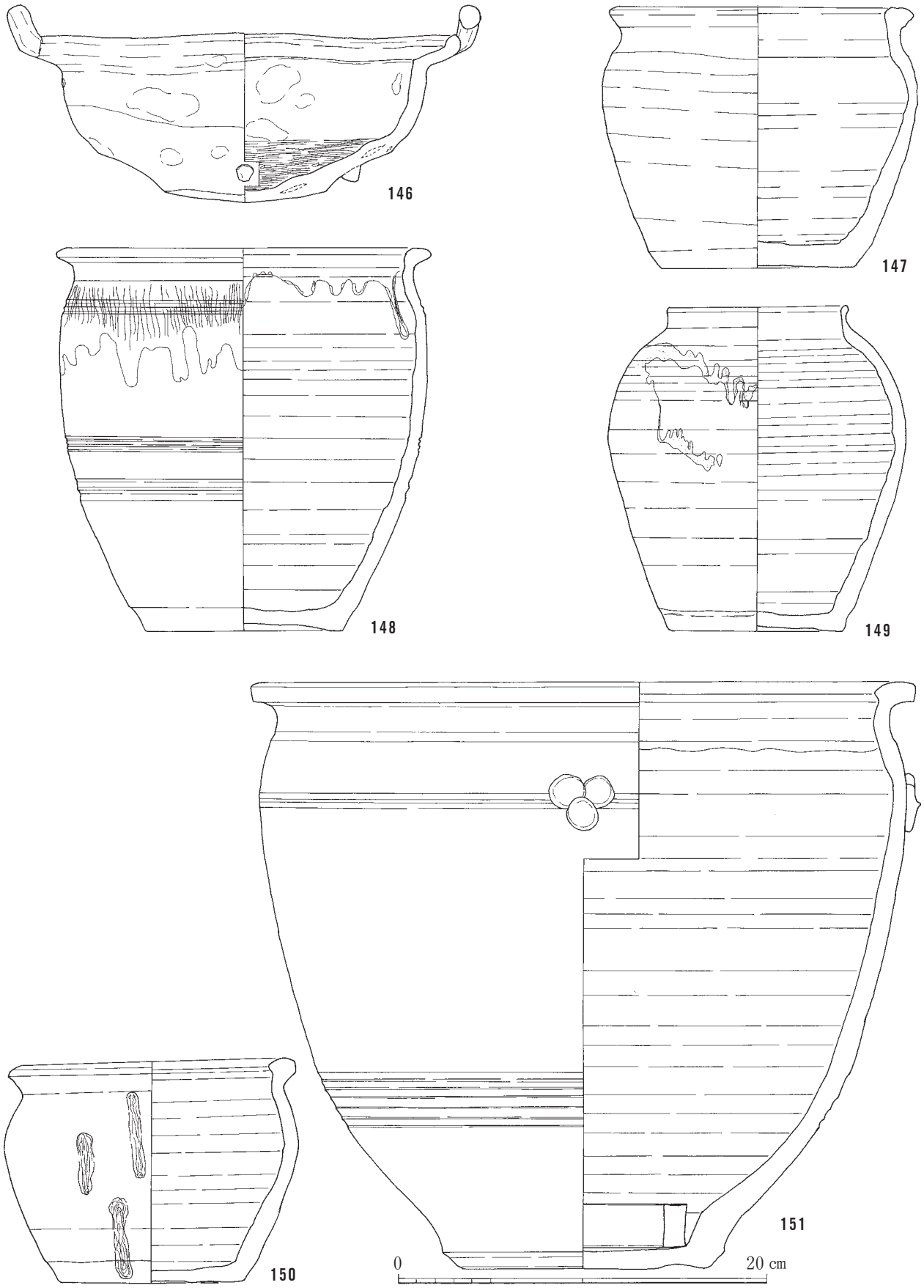


図 26　鍋・甕等実測図（縮尺 1/3）

甕（147～151）

147 は口径 16.2 ㎝、器高 14.0 ㎝、胴部最大径 16.8 ㎝、底径 10.1 ㎝。底部平底で胴部最大径はかなり上位にある。頸部は僅かに内傾気味に立ち上がり、口縁部は外方に短く突出。内器面頸部から外器面体部下端にかけて篦削りを施す。素焼き品で胎土は粗く、石英小粒を多く含む。埋納遺構 SX-02 の甕で、中に鶏骨 1 羽分が埋納されていた。**148** は口径 20.0 ㎝、器高 20.5 ㎝、胴部最大径 19.6 ㎝、底径 10.6 ㎝。2 本 1 組の沈線を、体部上端に 1 箇所、中央付近に 2 箇所施文する。頸部は短く真直ぐ立ち上がり、口縁部は短く外方に突出。裾部を篦削りし、底部は露胎で端部に砂目が見られる。外器面に飴釉を施釉後、口縁部から肩部にかけて黒釉を施釉。**149** は口径 9.8 ㎝、器高 17.4 ㎝、胴部最大径 15.9 ㎝、底径 9.5 ㎝。胴部最大径は上から 1/3 程度にあり、頸部はやや窄まり気味。口縁部は短く直線的に立ち上がる。口縁端部は僅かに肥厚し、丸みを帯びる。底部は平底露胎で砂が付着。口縁部～外器面裾端部に飴釉を施釉後、体部の上半に部分的に藁白釉を施釉。**150** は口径 15.5 ㎝、器高 12.0 ㎝、胴部最大径 15.8 ㎝、底径 9.8 ㎝。胴部最大径は上から 1/3 程度にある。口縁部短く、肥厚し丸みを帯びる。内器面側にも突出し、明確な稜線がある。底部は平底露胎で砂が付着。全面に飴釉を施釉後、体部に部分的に藁白釉を施釉。**151** は口径 35.6 ㎝、器高 31.5 ㎝、胴部最大径 34.6 ㎝、底径 13.6 ㎝。胴部最大径は上端部付近にあり、2 条の沈線を施し、その上 1 箇所に逆三ツ星状の粘土粒を貼り付ける。体部上端は内湾し、頸部は外反し口縁部は上部に反りながら外方へ短く突出。底部は平底露胎で砂目痕がある。口縁部～外器面裾端部に飴釉を施釉。内器面は露胎。内底にハマが付着。

井戸ポンプ（152）

152 は口径 27.4 ㎝、器高 46.0 ㎝、底径 20.9 ㎝。胴部は垂直に立ち上がり、頭部が膨らむ。口縁部は直角に内湾し、端部は丸みを帯びる。頭部下端に孔径 6.7 ㎝の円柱状の注口を斜め下に向かって付け、その下を 2 段の肘で支える。体部下方正面に“元祖長窯元 長沼式 新案特許”と記される。全面に布羅志釉を施釉後、頭部に緑青釉。同形のものが味楽窯に保存され“亀井式”とある。

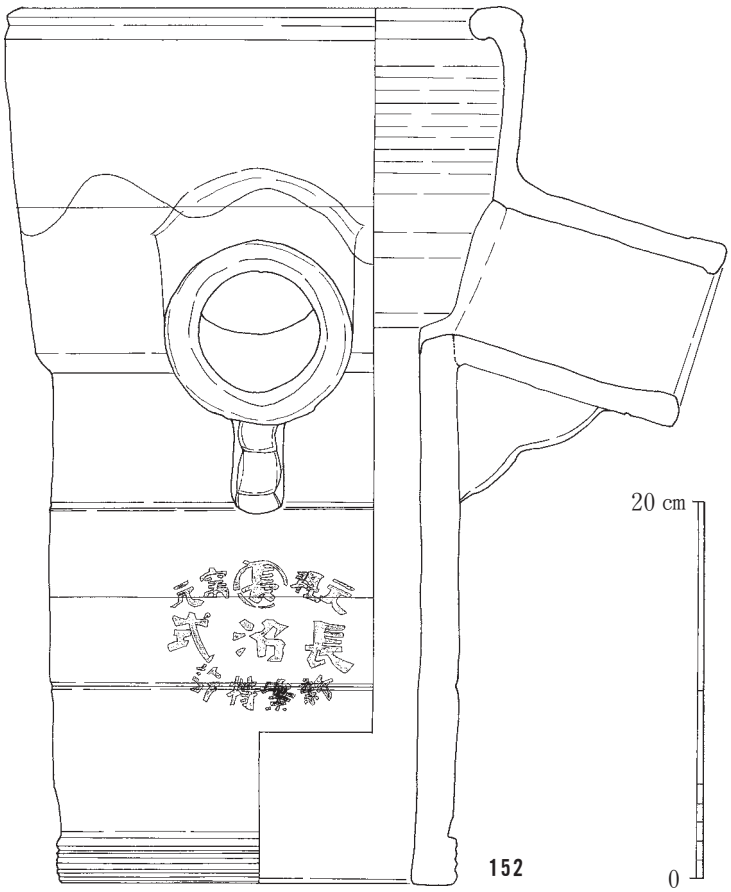


図 27　井戸ポンプ実測図（縮尺 1/4）

窯 道 具

窯道具にはトンバリ（耐火煉瓦）、トンパン、トチン、ハマ、匣、チャツなどが大量に出土した。窯道具には押印・刻書・墨書も見られ、その一部を図 28 に掲載した。押印には屋号や家紋、宝珠や数字等がある。ハマには帆掛け舟や鳥居、宝珠文等の線刻や、粘土で松樹をレリーフ状に貼り付けたもの、また三つ巴紋の墨書等がある。匣には、“植木鉢”や“大カメ”など焼成時の収容器種や“三枚”、“八枚”など収容枚数等がある。また、“弐尺六寸”等は焼成器種の大きさを、“升”などは容量であろう。“次八”や“助”などの陶工名もしくはその一部を刻書したものがあり、この点については第 4 章で触れる。紀年名の刻書は 2 点ある。いずれも西皿山開窯以後で、“文政十一年（1828）”、“天保九年（1838）”と判読できる。

図 28　刻書拓影（縮尺 1/4）

第4章　小　　結

今回の調査は、学術的研究が進んでいない西皿山について膨大な資料を提示する結果となった。資料整理の時間的制約で成果をまとめきれておらず、ここでは出土遺物の内容、窯道具の刻書、整地遺構等について若干の所見を述べ小結に代える。

整地層上の厚い陶片層は、土層観察から数次にわたって焼損品や窯道具を廃棄した様子が確認された。出土遺物中には、19世紀前半の紀年銘を持つ窯道具が含まれることから、焼損品にも近世後期のものが多く含まれると推測される。陶片層の形成時期は、下層から近代の所産と考えられるガラス小瓶が出土しており、近代以降に周辺の土地造成等に伴い、元来の物原から調査地点の周辺に廃棄しなおされたものと推測される。西皿山研究の嚆矢・奥村次八郎が、明治35年頃を回想して昭和46年に作図した『福岡西新町皿山繪圖』によれば、調査地点付近は『トンツラ山』と称される小山が描かれており、明治後期には既に調査前の状況を呈していたと推定される。

西皿山には近世3基の窯があったと伝えられ、亀井味楽窯に保存される登り窯の床面が、その一つと伝承されるが定かではない。他の窯はいずれも遺存せず、位置すら不明である。本調査で検出された雛壇状の整地層は、窯体本体が検出されなかったものの、傾斜角度は2.5寸勾配を採り、図29に示した他の高取系諸窯と近似しており、窯体に極めて近接した部分かあるいは窯体の建設に伴って造成された整地の可能性が非常に高いものと考えられる。形成時期は、SX-02埋納遺構出土の甕と擂鉢の編年的位置付けを待たねばならないが、造成に伴う地山整形後の盛土中にも多量の陶片が含まれることから、西皿山の開窯以後であろう。窯体の耐用年数は2～30年であり、幕末まで数回の造り替えがあったと考えれば、この事実も肯首される。匣の底部に刻書された『天保九年戌十一…西皿山（開カ）…』は、最後の文字が『開』であれば“開窯”の可能性もあり、窯の造り替えを記念する刻書との推測も可能である。

埋納遺構SX-02は、整地層に伴う祭祀や鎮壇施設と推測されるが、類例がなくその性格を明確にできない。推測の域を出ないが、本邦では魚介類を用いた祭祀あるいは儀礼などは多く知られるものの、鳥獣を使用したそれはあまり知られていない。翻って朝鮮半島では鳥獣類を供献する祭礼が現在でも多くあり、もしこの埋納遺構が彼地の習俗を伝えるものとすれば非常に興味深い。

出土した器種は、第3章2項に記述したが、日常雑器とそれ以外の奢侈品に大別される。

前者には、炊事・調理用具（甕、壺、鍋、擂鉢、片口、卸など）、貯蔵用具（甕、壺、樽など）、照明具（秉燭、灯明皿、油差、油壺など）や仏具用

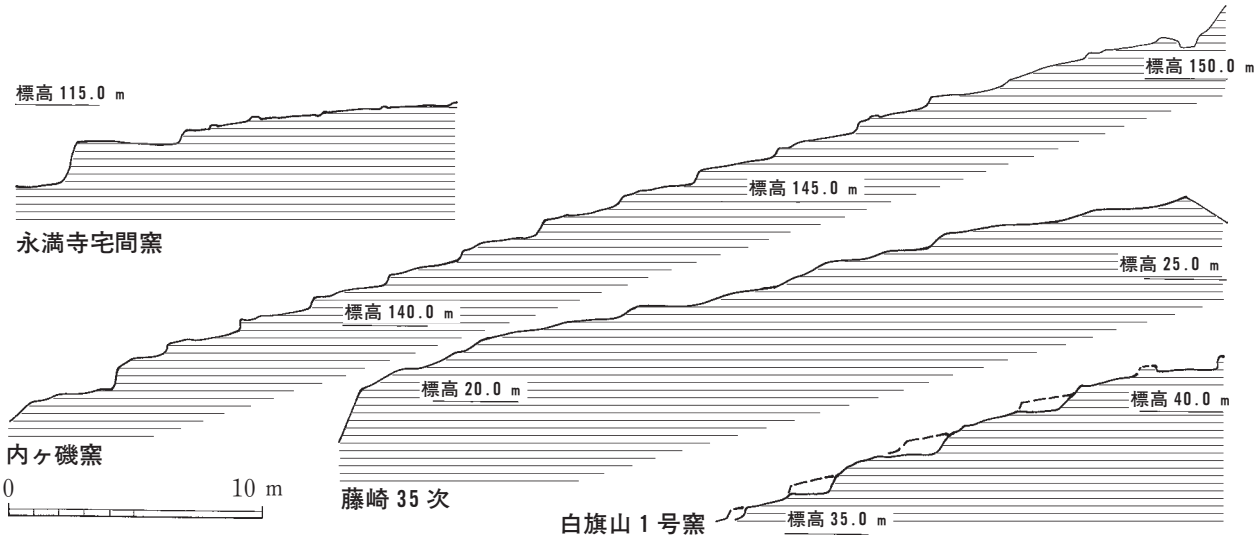


図29　高取系諸窯の勾配（縮尺1/300）

花入等があり出土遺物の大半を占め、商売窯としての性格を特徴付けるものである。帰属する年代は、出土層位から編年が組めないので現在のところ明確にできないが、整地層内から出土した擂鉢(139、141、142、144等)については、近世前期の内ヶ磯、永満寺宅間、白旗山などの出土品と比較して口縁部が極めて単純化している。また小石原焼や上野焼にも同形のものがある竹の節瓶（81）に関しても、節や枝の表現がきわめて退化し、胴部に七福神を貼り付けた瓶（73、74）についても同様である。

奢侈品は少量だが、細工物や精緻な作風のものがある。食器には、花文や魚介類など種々の意匠を凝らした型物の小皿（図17上段）や、托（25）など高級食器も確認された。托（25）には高台内に㊞印が押され、また銚子（67～71）にも同じ型と考えられる落款が見られる。㊞印は柳瀬家文書によれば高取常方、同重固、同方久、同英業に文政6年5月以降の献上品に押印のうえ上納させたことが記述されており、これ以降のものと考えられる。但し、近代の原幸六窯等でも同印が押されており、時期や製作者に関しては今後の比較検討が必要である。器壁の薄い精巧な小鉢(17)には、高台外に㊞印が押されており、天保・弘化年間の陶工・五十嵐専次の落款と推測される。

懐石料理や茶席で用いられる道具も少量ながら出土している。船形向付（26）は、類似した白旗山産のものが伝世し、釉調や造形が遠州好みとされる。鉢（31、33、34）は菓子鉢、碗（58～60）は薄茶碗と考えられる。茶道具に関しては134や135の形状が水指に類似するが、共に小さく使用に耐えない。茶入片は皆無である。

細工物には、香合(93)、亀形置物(94)、硯(103)、梵鐘形手焙（136）、稲荷社（137）等がある。これらは、東皿山や友泉亭で焼かれた床置や香炉等に見られる精緻さを欠くが、技術的にはこの系譜上にあると推測される。また瓢形花入（111）や螺子抜き形花入（108）等は掛花入で、後者の類例として白旗山時代の作品が伝世する。

窯道具には図28に示したように、窯印として陶工名やその一部、屋号、焼成器種やその大きさを刻書したものが少なからず出土した。陶工名については、以下のように推測されるが、世襲名が多く、時期を特定できない。

「助二」「助」……柳瀬助二
「三」……柳瀬三右衛門
「藤」……柳瀬藤右衛門
「次」……五十嵐次右衛門、同次衛、柳瀬次右衛門、同助次
「専」「千」……五十嵐専次（千次）
「喜」……高取喜十郎
「仙」……樺島仙作、山口仙七
「キ」……原幸六、樺島喜三郎

窯印の内、丸に一引は柳瀬氏の家紋である。他のものについては不明だが、窯印の存在は共同窯の傍証であり、多くの陶工が西皿山の経営に関与していたと考えられる。

生産品の流通に関しては今後の課題であるが、徳利（80）は、備前鞆の浦で産出される保命酒用の徳利であることが判った。肩部の㊥は、福山藩で同酒の生産を独占していた中村吉兵衛家の屋号『生玉堂（いくたまどう）』の商標で、同形の完形品が福山市鞆町の太田家住宅（旧中村家住宅・重文）に伝世する。保命酒は藩御用酒で、基本的に贈答愛玩用であり容器にも雅味あるものが多く用いられた。献上先で容器を選定しており、中には三彩など優美な絵付けを施したものもある。西皿山産の瓶はやや一般向けであったものと推測される。

西皿山は第三紀層独立丘陵に立地し、陶土としては全く不向きである。にもかかわらずこの地点に商売窯が設置されたことは、唐津街道と三瀬街道の結節点であり、近隣に姪浜や能古といった港湾が控えているという交通の要衝であることを考慮に入れねばなるまい。多量の生産品を流通させるためには近世宿駅制の発展をまたねばならず、また、大量の焼損品の廃棄や、窯からの煙害といった問題にも対処せねばならず、このような諸般の理由から福岡城下西郊のこの地に、東皿山、西皿山が相次いで開窯されたものと推測される。

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ふじさきいせきじゅうしち
書 名	藤崎遺跡 17
副 書 名	藤崎遺跡第 35 次調査報告書
巻 次	
シ リ ー ズ 名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 916 集
編 著 者 名	松浦一之介
編 集 機 関	福岡市教育委員会
所 在 地	福岡市中央区天神一丁目 8 番 1 号　電話　092-711-4667
発 行 年 月 日	平成 18 年 12 月 28 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
藤崎遺跡 35 次	福岡県福岡市 早良区高取 二丁目	40130		33° 45′ 46″	130° 21′ 00″	2005.02.17 ～ 2005.05.17	412	共同住宅建設

所収遺跡名	種 別	時 代	主な遺構	主な遺物	特記事項
藤崎遺跡	窯業施設	近世 ～ 近代	整地層 埋納遺構	高取焼 窯道具	調査地点は、近世高取焼西皿山の推定地に位置する。 膨大な量の廃棄された焼損品や、窯道具が出土した。 雛壇状の整地層を検出、窯業施設の一部と考えられる。

藤 崎 遺 跡 17

―藤崎遺跡第 35 次調査報告書―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 916 集

平成 18 年 12 月 28 日

編集・発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目 8 番 1 号
電話 092-711-4667

印　　刷　魚住印刷
福岡市博多区大博町 8 番 20 号
電話 092-291-1946

「西皿山」加藤一純・鷹取周成共編『筑前國續風土記附録』巻之三十八より